

平成 25 年度環日本海文化交流史調査研究集会の記録

はじめに

所長 福島 正実

環日本海文化交流史調査研究集会は、日本海に面した石川県の歴史的特質を明らかにするため、日本海沿岸域に共通するテーマを選んで沿岸各地域と調査・研究を行い、交流をはかるものです。本研究集会は、公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが平成 12 年度から「環日本海文化交流調査研究事業」の一環として実施しており、平成 25 年度で 14 回目の開催となりました。

本年度は日本海沿岸域から出土した舟に焦点をあて、その構造の変遷や使用形態を探るとともに、遺跡・遺構などを通じて、舟を使った活動や地域の水上交通の特質を明らかにしたいと考え、テーマを「舟と水上交通」としました。資料の集成や報告にあたられた皆様に感謝申し上げます。

- 1 主催 公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 2 会場 石川県埋蔵文化財センター研修室
- 3 参加者 当法人職員、県内外の埋蔵文化財関係者、考古学研究者、大学生等 80 名
- 4 内容及び日程
 - ・事前の打合 10 月 24 日（木）午後 3 時～
 - ・調査研究集会 10 月 25 日（金）午前 9 時～午後 4 時 30 分

地域別報告

九州地方（福岡県）江野道和（糸島市教育委員会）
山陰地方（鳥取県）君嶋俊行（鳥取県埋蔵文化財センター）
北陸地方（福井県）小島秀彰（若狭三方縄文博物館）
北陸地方（石川県）金山哲哉（公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）
北陸地方（富山県）廣瀬直樹（氷見市教育委員会）
北陸地方（新潟県）岩野邦康（新潟市新津鉄道資料館）
東北地方（秋田県）伊藤直子（男鹿市教育委員会）
北海道地方 鈴木 信（公益財団法人北海道埋蔵文化財センター）

討論

- ・資料見学会 10 月 26 日（土）午前 9 時～12 時

調査研究集会の推移

回数	開催期日	事業内容(調査研究集会テーマ)	記録の掲載 (石川県埋蔵文化財情報)
第1回	H13.2.23	環日本海交流史の現状と課題	
第2回	H14.2.22	鉄器の導入と社会の変化	第8号
第3回	H15.2.21	玉をめぐる交流	第10号
第4回	H15.10.24	縄文後晩期の低湿地集落－生業の視点で考える－	第11号
第5回	H16.10.29	古代日本海域の港と交流	第13号
第6回	H17.10.28	中世日本海域の土器・陶磁器流通－壺・壺・擂鉢を中心に－	第15号
第7回	H18.10.27	縄文時代の装身具－漆製品・石製品を中心に－	第17号
第8回	H19.10.26	日本海域における古代の祭祀－木製祭祀具を中心として－	第19号
第9回	H20.10.24	弥生時代の家と村	第21号
第10回	H21.10.23	日本海域の土器製塩－その系譜と伝播を探る－	第23号
第11回	H22.10.29	近世日本海域の陶磁器流通－肥前陶磁から探る－	第25号
第12回	H23.10.28	中世日本海域の墓標－その出現と展開－	第27号
第13回	H24.10.26	弥生時代の墓	第29号
第14回	H25.10.25	舟と水上交通	本号(第31号)

北部九州の船と交流～伊都国を中心に～

江野 道和（糸島市教育委員会）

1. はじめに

北部九州は古来より、朝鮮半島・大陸と列島内各地とを結ぶ交流の重要な拠点であった。半島南部から対馬、一支を経て末盧・伊都・奴の各国に至るルートは、『魏志』倭人伝に記された当時の主要外交ルートと位置付けられている。本稿では、北部九州から出土した船に関する資料の紹介を行った後に、日本海沿岸地域の交易の一例として玉作資料を取り上げる。

2. 船の部材（第1図、表1）

糸島地域では、潤地頭給遺跡、上罐子遺跡、今宿五郎江遺跡、元岡遺跡などで出土例がある。また、福岡県東岸の豊前地域では、延永ヤヨミ園遺跡から堅板が出土している。このうち、潤地頭給例は最も部材が充実しているといえ、6枚の船底部と1枚の舷側板の計7枚が出土している。船底部となる部材はそれぞれ長さ1.2～1.5mほどで、厚みは3.5～4.5cm程度、舷側板は、長さ1.5m、幅23cm、厚さ4.5cmである。いずれにもほぞ穴が穿たれており、桜の皮が残されている穴もみられる。これは船底と舷側を綴るために使われた可能性があり、このことから準構造船であったと考えられる。

3. 舟形木製品（第2図、表2）

弥生～古墳時代までの舟形木製品のうち、残りの良い資料としては福岡市の吉武樋渡遺跡、佐賀県の吉野ヶ里遺跡、長崎県の原の辻遺跡などの出土品がある。吉武樋渡例は長さ58.5cm、最大幅11.3cm、最大高9.0cmで、長さ対幅の比は5.1対1となり、舳と艤の形態が異なるところに特徴がある。吉野ヶ里例は長さ49cm、最大幅7.2cmで、長さ対幅の比率は約7対1となり、全体的に細長く、舳艤が共に大きく反り上がる。右舷の縁に櫂座と考えられる凹凸が残っている。原の辻例は長さ62.0cm、幅13.3cm、高さ9.5cmで、長さ対幅の比は4.6対1となり、他の2例と比べ幅広い。舷側板と船底部の接合部を表したと考えられる割り込みや舳部に堅板を固定する可能性のある溝が彫られていることから準構造船を表した可能性がある。

4. 絵画資料（第3図、表3）

絵画資料としては、土器に線刻された絵画と装飾古墳の壁画等がある。このうち、土器の絵画として、原の辻遺跡出土品は壺の頸部付け根付近に、ゴンドラ形の船が上下逆さまに描かれ、船の内側には櫂または漕ぎ手と考えられる縦線がびっしりと並ぶ。福岡県貫川遺跡出土品は、壺の肩部に船の絵が描かれる。舳艤が共に大きく反り上がり、中央部には長方形の箱形を載せ、船の下部には2本の櫂のような線が突き出る。

5. 船の推進具（第4図、表4）

北部九州における最古の例としては、佐賀県の東名遺跡からの出土品があげられ、合計26本が報告されており、いずれも縄文時代早期とされる。弥生時代の例として、福岡市雀居遺跡出土品は先端が鋭利に尖っており、漕ぐだけではなく、竿のようなく水底を突いて船を動かした可能性がある。

6. 船を介した日本海沿岸地域の交流（第5図）

北部九州と山陰・北陸地方との日本海沿岸交流を示す資料の一つに玉の製作が挙げられる。潤地頭給遺跡では弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて大規模な玉作り集落が形成されるが、この原石である碧玉の多くは島根県花仙山産であることが判明しており、少量ではあるが、石川県菩提産や新潟県猿八産もある（藁科2011）。

7. おわりに

潤地頭給と併行する時期に北部九州の玄界灘～響灘沿岸地域では玉作りを行う集落が展開していた。玉の原石や加工技術の搬入、製品の搬出等に船が活躍していたことは容易に想像され、この時期、日本海交易が活発に行われていたことを示す一つの証しといえる。

【引用・参考文献】

一瀬和夫 「船・ソリ」『古墳時代の考古学』5（同成社、2012年）

江野道和 「伊都国の港と船」『伊都国の研究』（学生社、2012年）

渡部俊哉 「肥前・壹岐の装飾古墳」『考古学ジャーナル』395（ニュー・サイエンス社、1995年）

藁科哲男 「九州地方使用玉類の組成と同じ組成の玉類の使用圏について」『魏志倭人伝の末盧国・伊都国』（日本玉文化研究会、2011年）

表1 主な船の部材一覧表（弥生～古代、北部九州）

図番号	資料名	遺跡名	遺構名	住 所	時 期	法 量 (cm)	樹 種	出 典	備 考
1	舟材	潤地頭給遺跡	II区 井戸	福岡県糸島市	弥生終末	長143	スギ	1	船底部1
1 2	舟材	潤地頭給遺跡	II区 井戸	福岡県糸島市	弥生終末	長142	スギ	1	船底部2
1 3	舟材	潤地頭給遺跡	II区 井戸	福岡県糸島市	弥生終末	長147	スギ	1	船底部3
1 4	舟材	潤地頭給遺跡	II区 井戸	福岡県糸島市	弥生終末	長120	スギ	1	船尾部（舡？）
1 5	舟材	潤地頭給遺跡	II区 井戸	福岡県糸島市	弥生終末	クスノキ	1		
1 6	舟材	潤地頭給遺跡	II区 井戸	福岡県糸島市	弥生終末	クスノキ	1		
1 7	舟材	潤地頭給遺跡	II区 井戸	福岡県糸島市	弥生終末	長150	スギ	1	舷側板。はぞ穴に桜の皮が残る。
	舟材	上護子遺跡		福岡県糸島市	弥生中期	長108		2	船？
	舟材	今宿五郎江遺跡	SD50	福岡県福岡市	弥生後期初頭	(長147)		3	船底？
	舟材	今宿五郎江遺跡	SD50	福岡県福岡市	弥生後期初頭	(長74)		3	船底？
	舟材	元岡遺跡		福岡県福岡市	弥生後期～古墳前期			2	未報告。隔壁？
	舟材？	拾六町ツイジ遺跡	(G-3) 第3号土坑下層	福岡県福岡市	弥生前期後半	長(42.3)	クスノキ	4	
	舟材	延永ヤヨミ園遺跡	井戸	福岡県行橋市	弥生終末			5	未報告。堅板
	舟材	伊木力遺跡	遺物包含層	長崎県諫早市	縄文前期前葉～中葉	長(650)		6・7・8	船体
	舟材	唐比出土		長崎県諫早市(森山町)				6	船体。塙屋氏、安楽氏のご教授による。

表2 主な舟形木製品・埴輪一覧表（弥生～古代、北部九州）

図番号	資料名	遺跡名	遺構名	住 所	時 期	法 量 (cm)	樹 種	出 典	備 考
1	舟形木製品	今宿五郎江遺跡	SD100	福岡県福岡市	弥生後期初頭	(長48.8)	1		
2	舟形木製品	今宿五郎江遺跡	SD100	福岡県福岡市	弥生後期初頭	(長41.5)	1		
3	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長23.7	2		報22。中央に屋形あり。樹皮を残す。
4	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長16.2	2		報23。中央に屋形あり。
5	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長18.2	2		報24。中央に屋形あり。樹皮を残す。
6	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長21.0	2		報25。中央に屋形あり。
7	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長20.5	2		報26。中央に屋形あり。
8	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長22.3	2		報27。中央に屋形あり。
9	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長19.6	2		報28。中央に屋形あり。
10	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長22.7	2		報29。中央に屋形あり。
11	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長17.5	2		報30。中央に屋形あり。
12	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長21.5	2		報31。中央に屋形あり。
13	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長17.0	2		報32。中央に屋形あり。
14	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長11.7	2		報33。中央に屋形あり。
15	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長(10.3)	2		報34。中央に屋形あり。
16	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長(8.4)	2		報35。中央に屋形あり。
17	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長10.8	2		報36。中央に屋形あり。
18	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長16.3	2		報37。中央に屋形あり。
19	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長(19.8)	2		報38。中央に屋形あり。
20	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長15.2	2		報39。屋形無し
21	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長12.9	2		報40。屋形無し
22	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長11.5	2		報41。屋形無し
23	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長18.8	2		報42。屋形無し
24	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長19.3	2		報43。屋形無し

図番号	資料名	遺跡名	遺構名	住 所	時 期	法 量 (cm)	樹 種	出 典	備 考
25	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX001	福岡県福岡市	7C末～8C後半	長17.1		2	報44。屋形無し
26	舟形木製品	元岡・桑原遺跡群	池状遺構 SX123	福岡県福岡市	奈良(7～8C)	長16.5		3	
27	舟形木製品	拾六町ツイジ	3号土坑上層	福岡県福岡市	弥生後期初頭	(長27.7)	4・5・6		
28	舟形木製品	拾六町ツイジ	包含層	福岡県福岡市	古墳中期	(長30.4)	7・5		
29	舟形木製品	拾六町ツイジ	包含層	福岡県福岡市	古墳中期(5C前半)	(長30.8)	7・5		
30	舟形木製品	拾六町ツイジ	包含層	福岡県福岡市	古代？	長17.4	7・5		
31	舟形木製品	吉武種渡遺跡	吉武種渡	河内川川底	福岡県福岡市	古墳中期	(長58.5)	8・5	
32	舟形木製品	井和田C遺跡	SD01	福岡県福岡市	奈良(8C後半)	長20.4		9・10	
33	舟形木製品	高隈遺跡(板付B-12b・C区)	SD01	福岡県福岡市	奈良～平安	長15.3		11	
34	舟形木製品	須恵永田遺跡	2号井戸	福岡県春日市	弥生後期	(長21.5)		12	
35	舟形木製品	須恵永田遺跡	2号井戸	福岡県春日市	弥生後期	(長13.6)		12	
36	舟形木製品	大宰府条坊跡	SD001下層	福岡県太宰府市	奈良(8C前半～中頃)	(長35.7)		13・5	
37	舟形木製品	大宰府条坊跡	SD001下層	福岡県太宰府市	奈良(8C前半～中頃)	長18.4		13・5	
38	舟形木製品	大宰府条坊跡	SD001下層	福岡県太宰府市	奈良(8C前半～中頃)	長21.6		13・5	
39	舟形木製品	大宰府条坊跡	SD001下層	福岡県太宰府市	奈良(8C前半～中頃)	—		13・5	
40	舟形木製品	大宰府史跡	SD2340下層	福岡県太宰府市	奈良(8C前半)	長4.8		14・5	
41	舟形埴輪	堤当寺古墳		福岡県朝倉市	古墳中期(5C中頃)	(長30)		15・16	
2・42	舟形木製品	吉野ヶ里遺跡(田一木松地区232調査区)	SD40	佐賀県神埼市吉野ヶ里町	弥生中期後半～後期前半	長49.0	カヤ	17	櫛形の表現有。時期については細川金也氏からご教示頂いた。
43	舟形木製品	吉野ヶ里遺跡(田一木松地区232調査区)		佐賀県神埼町	弥生中期後半～後期前半	長30		未報告	舟形容器か。細川氏、渡部芳久氏からご教示頂いた。
44	舟形木製品	菜畠遺跡	包含層	佐賀県唐津市	弥生中期	(長14.5)		18・10	櫛部か。
45	舟形木製品	中原遺跡	2区 SD256	佐賀県唐津市	奈良	長30.5	マツ属		輪に堅板をはめ込むための構造。
46	舟形木製品	中原遺跡	2区 SD256	佐賀県唐津市	奈良	長23.8	スギ		船底内部3カ所を深く彫る。
47	舟形木製品	中原遺跡	2区 SD256	佐賀県唐津市	奈良	長8.1			
48	舟形木製品	中原遺跡	2区 SD256	佐賀県唐津市	奈良	(長14.8)			舟形容器か。
49	舟形木製品	石木遺跡	SX006	佐賀県唐津市	古墳	長45.5		20・5	
2・50	舟形木製品	原の辻遺跡	河川跡 SD05	長崎県壱岐市	弥生中期	長62.0		21・22	

表3 主な絵画関係資料一覧表 (弥生~古墳、北部九州)

図 番 号	資料名	遺跡名	遺構名・描かれた 位置	住 所	時 期	法 量 (cm)	出 典	備 考
1	線刻土器	前田遺跡		福岡県太宰府市	弥生後期	1、2		
3	線刻土器	賀川遺跡		福岡県北九州市		3		
3	彩色壁画	竹原古墳	後室奥壁	福岡県若宮市	6C 後半	4 ~ 6、23		
4	彩色壁画	五郎山古墳	玄室奥壁、玄室東側壁、玄室西側壁、 福岡県筑紫野市 前室北壁			7、4、23、 24		
5	彩色壁画	瀬戸1号横穴 夷壁		福岡県中間市	7C 前半	8、4、23		
6	線刻壁画	土手の内構穴 1号	夷壁	福岡県中間市	—	4、23		
7	線刻壁画	椎生羅漢山横穴 3a-1号	前室	福岡県中間市	7C 前半~後半	4、23		
8	線刻壁画	黒部6号横穴	玄室左側壁、左玄室	福岡県豊前市	6C 末~7C 中	9、4、23		
9	彩色壁画	原古墳	玄室奥壁	福岡県うきは市	6C 後半	10、4、23		
10	彩色壁画	鳥船塚古墳	玄室奥壁	福岡県うきは市	6C 後半	4、23		
11	彩色壁画	日岡古墳	玄室右側壁	福岡県うきは市	6C 前半	11、4、23		
12	彩色壁画	珍塚古墳	後室奥壁	福岡県うきは市	6C 後半	4、23		
13	彩色壁画	下馬場古墳	後室右側壁	福岡県久留米市	6C 後半	12、4、23		
14	彩色壁画	中原狐塚古墳		福岡県久留米市	6C 前半	5、23		
15	彩色壁画	西船古墳		福岡県久留米市	6C 後半	5、23、22		
16	彩色壁画	若宮古墳		福岡県久留米市	—	5		
17	彩色壁画	寺德古墳		福岡県久留米市	6C 後半	23		
18	彩色壁画	隈3号横穴		福岡県久留米市	6C 未	23		
19	線刻壁画	福荷山横穴		福岡県久留米市	6C 未	23		
20	線刻壁画	倉永古墳		福岡県大牟田市	6C 後半	5、23		
21	彩色壁画	蘿ノ尾古墳		福岡県大牟田市	6C 後半	13、4、23		
22	彩色壁画	祇上観音塚古墳	後室奥壁	福岡県筑前町	6C 未	14、4、23		
23	線刻壁画	猿塚古墳	後室奥壁、左右側壁	福岡県朝倉市	6C 後半~7C 前半	15、4、23		
24	線刻土器	湯古2号横穴		福岡県大野市	古墳前期	4		
25	線刻壁画	花立山古墳		福岡県小郡市	古墳後期	5		
26	彩色壁画	田代太田古墳	後室袖石、後室奥壁、中室右側壁	佐賀県鳥栖市	6C 後半	16、4、23		
27	線刻壁画	天山横穴 北の森古墳	内壁	佐賀県多久市	6C 未	4、23		
28	線刻壁画	北の森古墳	内壁	佐賀県多久市	6C 未~7C 初	5		
29	線刻壁画	古賀山4号横穴	内壁	佐賀県多久市	7C 前半	4		
30	線刻壁画	妻山4号横穴		佐賀県白石町	6C 後半	5、23		
31	線刻壁画	湯崎2号横穴		佐賀県白石町	6C 未	5、23		
32	線刻壁画	勇猛寺古墳2 奥室	玄室右側壁、玄室奥壁	佐賀県北方町	7C 前半	17、4、23		
33	線刻土器	原の辻遺跡	石田大原地区	長崎県若狭市	弥生中期後半	9.2 × 2.3 18	船のほかに線の絵有	
34	線刻土器	カラカミ縄文		長崎県若狭市	弥生後期	4	土器焼成後に線刻	
35	線刻壁画	鬼屋塚古墳	南側左側壁、右側壁	長崎県若狭市	7C 後半以降	19、18、23	後世の線刻である可能性も	
36	線刻壁画	大米古墳	袖石	長崎県若狭市	6C 未~7C 初	20、18、23	後世の線刻である可能性も	
37	線刻壁画	尾越古墳	後室右側壁	長崎県若狭市	7C 前半	4		
38	線刻壁画	兵頭古墳	前室右側壁	長崎県若狭市	6C 未~7C 前半	18、23	後世の落書きの下に船の線刻残る	
39	線刻壁画	百田頭5号横穴	美道部落石	長崎県若狭市	6C 後半~7C	4、23	後世の線刻である可能性も	
40	線刻壁画	双六古墳	前室右側壁	長崎県若狭市	6C 中頃	4、23	後世の線刻である可能性も	
41	線刻壁画	長戸鬼塚古墳	前室左側壁	長崎県諫早市	6C 未~7C 前半	4、23		

表4 主な櫛状木製品一覧表 (縄文~古墳、北部九州)

図 番 号	資料名	遺跡名	出土地点・遺構	住 所	時 期	法 量 (cm)	樹 種	出 典	備 考
1	櫛状木製品	赤村遺跡	第4次調査 SX12	福岡県福岡市	弥生前期末~中期初頭	長 138.7	シイ	1 ~ 6	完形 1
2	櫛状木製品	拾六町ツイジ 遺跡	第3号土坑	福岡県福岡市	弥生後期初頭	長 109.7	(散孔材)	7、4 ~ 6	破片 1
3	櫛状木製品	拾六町ツイジ 遺跡	第4号土坑	福岡県福岡市	弥生	長 (56.2)	タイミンタ チバナ	7、4 ~ 6	
4	櫛状木製品	長行遺跡		福岡県北九州市	弥生前期末	長 101.4	カシ	8、9、4 ~ 6	
5	櫛状木製品	長行遺跡		福岡県北九州市	弥生前期末	長 101.1	カシ	8、4 ~ 6	
6	櫛状木製品	長行遺跡		福岡県北九州市	弥生前期末	長 105.3	カシ	8、4 ~ 6	
7	櫛状木製品	長行遺跡		福岡県北九州市	弥生前期末	長 (98)	カシ	8、4 ~ 6	
8	櫛状木製品	長行遺跡		福岡県北九州市	弥生前期末	長 (90)	カシ	8、4 ~ 6	
9	櫛状木製品	長行遺跡		福岡県北九州市	弥生前期末	長 (82)	カシ	8、4 ~ 6	
10	櫛状木製品	長行遺跡		福岡県北九州市	弥生前期末	長 94.8	カシ	8、4 ~ 6	
11	櫛状木製品	長行遺跡		福岡県北九州市	弥生前期末	長 100.7	カシ	8、4 ~ 6	
12	櫛状木製品	長行遺跡		福岡県北九州市	弥生前期末	長 99.3	カシ	8、9、4 ~ 6	
13	櫛状木製品	長行遺跡		福岡県北九州市	弥生前期末	長 100.3	カシ	8、4 ~ 6	
14	櫛状木製品	金山遺跡	VIX B 91 東 端6層下層~7 層	福岡県北九州市	弥生終末~古 墳初頭	長 72.7	アカガシ垂 屈	10、11、4 ~ 6	
15	櫛状木製品	畔遺跡	1区4a・4b層	福岡県北九州市	弥生前期末~中 期	長 (82.4)		12、4 ~ 6	
16	櫛状木製品	畔遺跡	1区4a・4b層	福岡県北九州市	弥生前期末~中 期	長 (13.8)		12、4 ~ 6	
17	櫛状木製品	上原遺跡	1区3層	福岡県糸島市	弥生~後期	長 (88.2)		4 ~ 6	
18	櫛状木製品	夜丘・三代遺 跡群	OMR区・第6 区	福岡県新宮町	古墳前~中期	長 100.8		13、3 ~ 6	完形 1
19	櫛状木製品	離川遺跡	TSX001	福岡県太宰府市	弥生時代後期~ 古墳前期	長 (75)		14、4 ~ 6	
420	櫛状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (115.3)	ヒサカキ	15、4 ~ 6	報 45
421	櫛状木製品	東名遺跡	第2貝塚間層6	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (50.6)	クスノキ科	15	報 46
422	櫛状木製品	東名遺跡	第2貝塚間層1	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (29.8)	ヤマハゼ	15	報 47
423	櫛状木製品	東名遺跡	第2貝塚 SK2056	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (66.1)	クスノキ科	15	報 48
424	櫛状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (32.0)		15	報 49
425	櫛状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (40.8)	イヌガヤ	15	報 50
426	櫛状木製品	東名遺跡	第2貝塚間層3	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (34.1)	クスノキ科	15	報 51
427	櫛状木製品	東名遺跡	第1貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (30.0)	ニガキ	15	報 52
428	櫛状木製品	東名遺跡	第1貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (18.2)	ヒサカキ	15	報 53
429	櫛状木製品	東名遺跡	第1貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (17.8)		15	報 54
430	櫛状木製品	東名遺跡	第1貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (17.0)	サカキ	15	報 55
431	櫛状木製品	東名遺跡	第1貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (18.1)		15	報 56
432	櫛状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (33.3)	マキ綱	15	報 57
433	櫛状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (25.9)	ヒサカキ	15	報 58
434	櫛状木製品	東名遺跡	第2貝塚間層	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (24.0)		15	報 59
435	櫛状木製品	東名遺跡	第2貝塚間層6	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (21.6)	ヒサカキ	15	報 60
436	櫛状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (18.8)	サカキ	15	報 61
437	櫛状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (19.1)	モッコク	15	報 62
438	櫛状木製品	東名遺跡	第2貝塚間層1	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (19.7)	ヒサカキ	15	報 63
439	櫛状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (19.6)	カヤ	15	報 64
440	櫛状木製品	東名遺跡	第2貝塚間層1	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (21.5)	ゴンズイ	15	報 65
441	櫛状木製品	東名遺跡	第1貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (19.2)	クスノキ科	15	報 66
442	櫛状木製品	東名遺跡	第2貝塚 SK2021	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (9.9)	カヤ	15	報 67
443	櫛状木製品	東名遺跡	第2貝塚間層3	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (14.7)	クスノキ	15	報 68
444	櫛状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (32.7)	サカキ	15	報 69
445	櫛状木製品	東名遺跡	第2貝塚	佐賀県佐賀市	縄文早期	長 (8.7)	サカキ	15	報 70
446	櫛状木製品	田原遺跡		長崎県平戸市	弥生早期	長 108		16、4 ~ 6、 9	

5 「九州の遺跡・古墳」 (http://www.netpia.jp/history/kofun.htm)

6 金闇丈夫 「手都郡若宮町竹原古墳奥壁の壁画」 「九州考古学」 19 (1963年)

7 九州考古学会 「北九州古墳園」 (1951年)

8 小田富士夫 「福岡県若宮町装飾櫛穴蓋塗報」 「史蹟」 74 (1957年)

9 玄洋開発会社 「黒部古墳群」 (1979年)

10 烏島虎彦 「後に於ける二、三の装飾古墳の新例」 「歴史と地理」 14-1 (1938年)

11 烏島虎彦 「ノイコ・月ノノ古墳」 「福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書」 第一報 (1925年)

12 福岡県 「古石室」 「福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書」 第一報 (1925年)

13 大牟田市教育委員会 「大牟田市文化財解説」 (1960年)

14 玉京大架 「奈都郡紙上山の音櫛穴古墳の調査」 「福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書」 7 (1932年)

15 渡辺正記 「古賀精里」 「筑後国朝倉郡福塚古墳」 「福岡県文財調査報告書」 17 (1954年)

16 「田代太田塚」 「在賀県史蹟名勝天然記念物調査報告書」 第一報 (1928年)

17 佐賀県立博物館 「装飾古墳の壁画」 (1973年)

18 村川逸郎 「若狭島内「船」に関する線刻土器及び古墳の線刻壁画」 「原の辻ニュースレター」 24 (長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所、2006年)

19 副島康司・木村大太「鬼屋久保」 「郡・浦町の古墳」 (宅崎郷土、1981年)

20 郷ノ浦町教育委員会 「大米古墳」 (2000年)

22 赤司善平 「水鶴山麓の装飾古墳・西館古墳を中心とした近年の調査成果」 「月刊 考古学ジャーナル」 395 (ニューサイエンス社、1995年)

23 西山由美子 「古墳に描かれた船」 「装飾古墳の展開」 埋蔵文化財研究会 (2002年)

24 佐賀県市教育委員会 「国史跡・五郎山古墳」 (1998年)

1 「出典 表3」

1 西日本新聞社 「船の文様入り土器片を発掘」 (1990年4月24日)

2 浅利幸一 「土器に描かれた船~弥生~古墳出現期を中心として」 「市原市文化財センター研究紀要Ⅱ」 (財団法人市原市文化財センター、1993年)

3 財団法人北九州市教育文化財団埋蔵文化財調査室 「古賀遺跡7」 (1993年)

4 財団法人北九州市教育文化財団埋蔵文化財調査室 「原の辻遺跡」 (1993年)

5 福岡市歴史資料館 「古代の船」 (1988年)

6 福岡市歴史資料館 「原の辻遺跡」 (1988年)

7 福岡市歴史資料館 「原の辻遺跡」 (2000年)

22 林隆広 「原の辻遺跡と舟」 「原の辻ニュースレター」 26 (長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所、2006年)

12 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 「金山遺跡Ⅰ・V区」 (1999年)

12 財団法人 北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 「古水遺跡第3次・長野フンデ遺跡 (6D・6E区)」 (2005年)

13 西田大輔 「夜臼・三代遺跡群第4回」 (新宮町教育委員会、1994年)

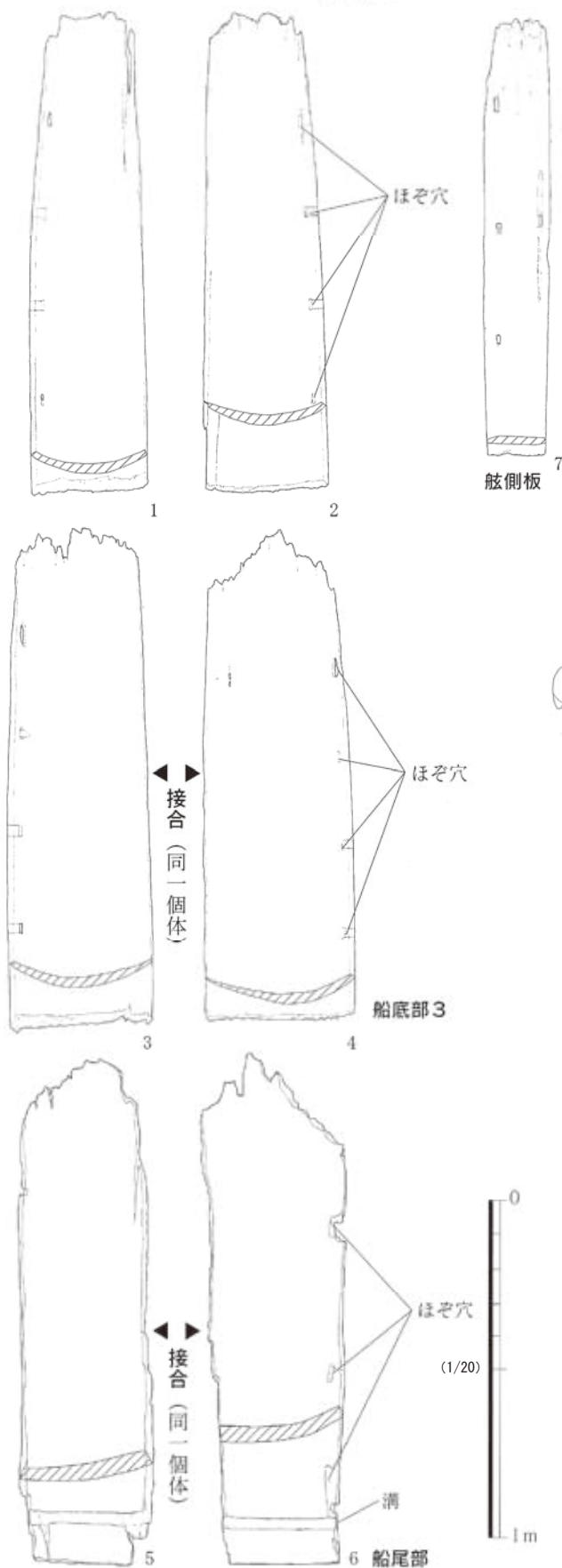
14 太宰府市教育委員会 「太宰府・佐野地区遺跡群VI-難川遺跡第1次調査」 (1996年)

15 佐賀市教育委員会 「東名遺跡群II」 (2009年)

16 安楽美 「里田遺跡」 (田平町教育委員会)

船底部1

船底部2



※船底部1と2は接合せず別個体。船底部3と船尾部のそれぞれの2枚については同一個体である。

第1図 潤地頭給遺跡出土準構造船部材

1 花仙山 (島根県松江市)

2 水晶山 (福岡県北九州市)

3 志の瀬海岸 (福岡県福岡市)

4 城野遺跡 (福岡県北九州市)

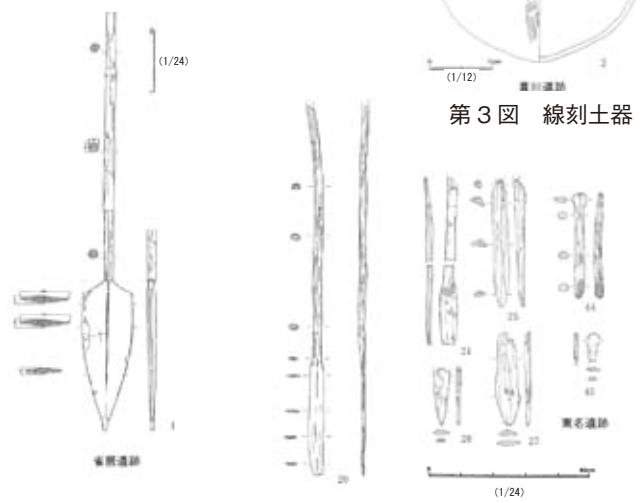
5 銀八 (新潟県佐渡市)

6 哲提 (石川県小松市)

7 中野清水遺跡 (島根県出雲市)



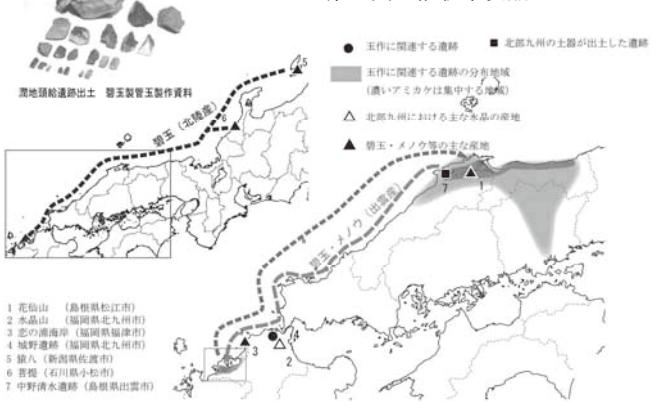
第2図 舟形木製品



第3図 線刻土器



第4図 標状木製品



第5図 日本海沿岸地域の交流 (玉作り)

山陰地方の舟と水上交通～青谷上寺地遺跡出土資料を中心として～

君嶋 俊行（鳥取県埋蔵文化財センター）

青谷上寺地遺跡出土の舟

山陰地方の出土舟資料については、近年、鳥取市青谷町に所在する国史跡青谷上寺地遺跡において大幅な増加をみており（君嶋編 2012）、弥生時代の舟研究に新たな理解をもたらす内容を含んでいる。青谷上寺地遺跡は弥生時代を中心に繁栄した集落遺跡であり、三方を山に囲まれた青谷平野に立地する。弥生時代の青谷平野には潟湖（古青谷湾）が広がっており、青谷上寺地遺跡はこの内湾に臨む港湾集落であった。

青谷上寺地遺跡の実船資料は約 50 点に及び、船首の形状によって大きく 2 種類に分けられる。

I 型 平面形は舷側から船首にかけて内湾するカーブを描いて大きく幅を減じる。舷側縁には貫通孔を有する。I 型である第 1 図 1 は、船首へ至るカーブと孔の位置が大型船として知られる久宝寺遺跡（大阪府）出土堅板型準構造船とほぼ一致することから、I 型は久宝寺出土船と同形態の堅板型準構造船となる可能性が高い。

II 型 約 30 点の船首破片が確認されており、量的に青谷上寺地遺跡の舟の主体を占める。以下のようないくつかの特徴を持つ（第 2 図）。

- ①船首の先端は、舷側から大きく幅を減じることなく、平面四角形に丁寧に加工される。
- ②船首は大きく反り上がる。その角度は底面の反り上がり開始位置で 10° 前後、先端付近では 20°～25° となる。
- ③舷側上面は丸く収め、舷側板を載せるための加工が見られない。
- ④船内は二段に割り込まれる。
- ⑤船首に方形の貫通孔（先端の縦孔）を持つ例が多い。この縦孔は左右 1 対で設けられたことが推測される。
- ⑥船首の底面側に、四角形の割り込み（裏割り込み）を持つ例が多い。貫通孔と割り込みの位置関係にはバラエティーがある。なお、先端の縦孔と裏割り込みの位置関係は多様であり定型化していないことから、両者はそれぞれ機能を異にするものと考えられる。
- ⑦船首の破片から原本の径を算出し本来の幅を復元し、既知の資料の長幅比を参考に長さを算出する

と、II 型の船の多くは長さ 6～12 m に復元される。

上記の特徴のうち①②については、「貫型準構造船」の特徴と一致するが、舷側上面に舷側板を載せるための加工が認められないという③の属性を重視するならば単材丸木舟ということになる。

青谷上寺地遺跡では、実船資料の他、8 点の模型資料（舟形木製品）が出土しており、その形態は先述した実船資料に対応する形で 2 類型に分けられる。I 型を模したと考えられる模型（第 3 図 1）の船首には堅板を嵌めこむ斜めの溝が表現されていること、II 型を模したと考えられる模型（第 3 図 2）の舷側には舷側板を綴じるための孔が表現されていないことは、I 型が堅板型準構造船であり、II 型が丸木舟であるという先の推測を補強する状況証拠となる。

青谷上寺地遺跡における舟の利用景観

青谷上寺地遺跡において量的に主体を占めるのは II 型の丸木舟であり、これに少数の堅板型準構造船（I 型）が加わる組成となる。それぞれの所属時期について、模型を含めて整理すると、後者は弥生時代後期以降に認められるのに対し、前者は中期段階から存在する。弥生時代後期以降、大型船は

準構造船、中・小型船は丸木舟という構造の異なる舟が使い分けられていた点が、青谷上寺地遺跡の特徴であり、大型船から小型船まで堅板型準構造船が多用された琵琶湖沿岸とは異なる様相である（第1表）。このことは、縄文時代以来スギの大径木が入手しやすい環境にあり、強度に優れる丸木舟が好まれた結果と評価できよう（横田2012）。

青谷上寺地遺跡の丸木舟の系譜

Ⅱ型の丸木舟は極めて規格性が高く、かつその形態は縄文時代の丸木舟と大きく異なる。船首・船尾が大きく反り上がる船形については、日本列島内外の絵画資料にいわゆる「ゴンドラ型」の舟が多く描かれており、外来要素である可能性も考えられる。船内を二段に割り込む類例は、青谷上寺地遺跡以外には目久美遺跡（米子市）出土例のみが管見に及んでいる。模型資料では八日市地方遺跡（小松市）に同様の特徴を持つ例があり、北陸地方に船内を二段に割り込む実船が存在したことを示唆する資料と言えよう。なお、これら2例は、船首の反り上がりはさほど顕著ではない。「船首（船尾）の反り上がり」と「船内の二段の割り込み」は別個の系譜を持つ属性であり、それらが青谷上寺地遺跡において融合したのが、Ⅱ型の丸木舟であると考えられないだろうか。

まとめ

内湾に臨む港湾集落であった青谷上寺地遺跡では、大型の堅板型準構造船と、中・小型の特異な形態の丸木舟とが存在した。丸木舟の系譜を明らかにすることは今後の重要な検討課題であるが、船内を二段に割り込む特徴については、北陸地方の舟にも存在する可能性がある。山陰と北陸との頻繁な往来を背景に、丸木舟に「地域型」が成立した可能性は充分に想定し得る。そしてこのことは、弥生時代後期以降に盛行した準構造船が画一的な構造を持つことと表裏の現象として評価する必要があろう。いずれにせよ、青谷上寺地遺跡独特の丸木舟は、実態の不明瞭な貫型準構造船と密接な関係にあることが予想され、その構造や系譜を明らかにするうえで重要な資料である。

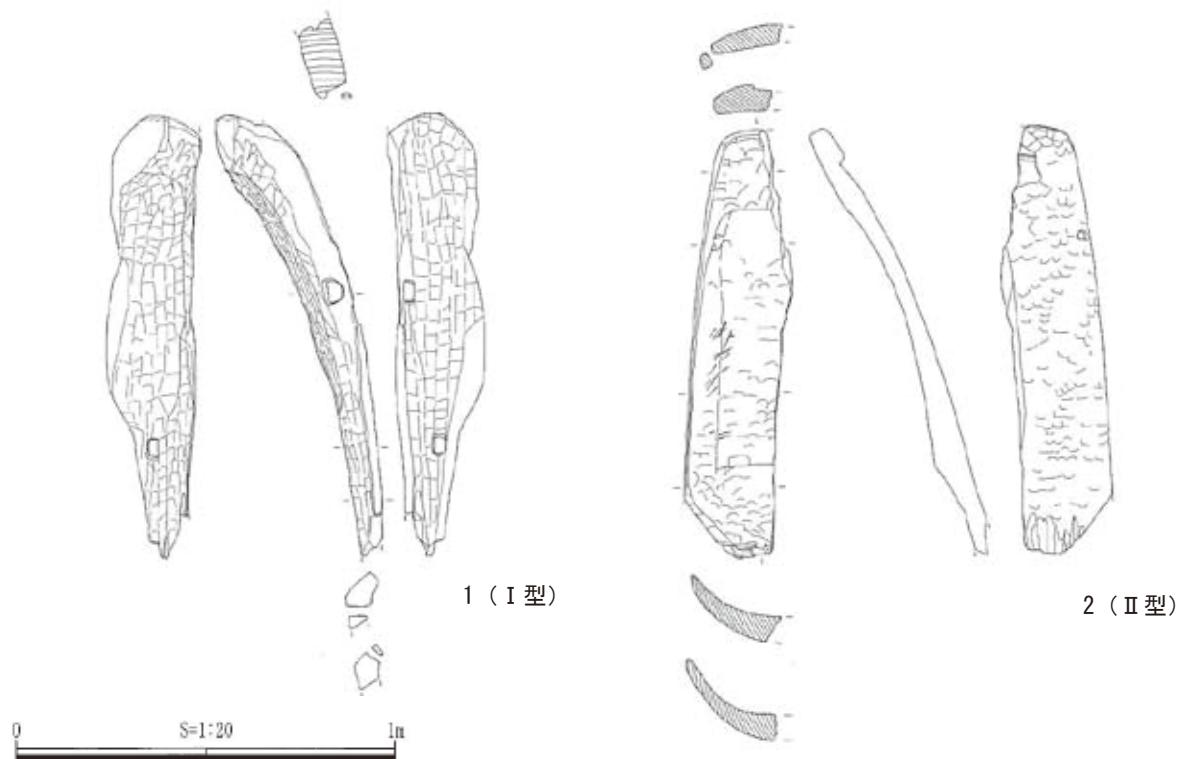
なお、研究集会の資料では山陰地方の海岸地形や縄文時代の丸木舟、古代の水上交通についても触れたが、紙幅の都合で割愛する。

【引用・参考文献】

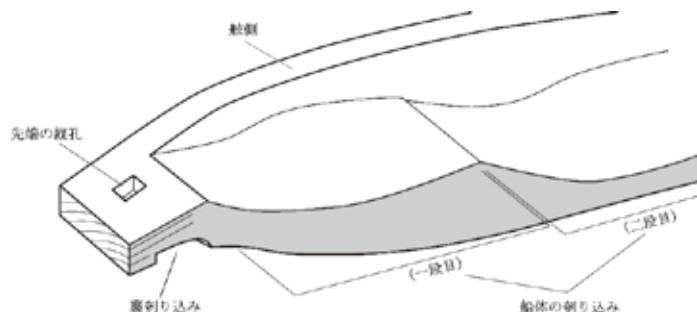
君嶋俊行編 2012 『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告8 木製農工具・漁撈具』鳥取県埋蔵文化財センター
佐伯純也編 2003 『目久美遺跡Ⅷ』財団法人米子市教育文化事業団
塙本浩司編 2013 『弥生人の船 モンゴロイドの海洋世界』大阪府立弥生文化博物館
中川 寧 2009 「山陰の船～出雲市五反配遺跡の堅板と考えられる木製品～」『木・ひと・文化～出土木器研究会論集～』
出土木器研究会
中原 齊 1998 「山陰の丸木舟」『考古学ジャーナル』No.435、ニュー・サイエンス社
錦織 勤 2013 『古代中世の因伯の交通』鳥取県史ブックレット12、鳥取県
深澤芳樹 2003 「弥生時代の船、川を進み、海を渡る」『弥生創世記』大阪府立弥生文化博物館
福海貴子・橋本正博・宮田明編 2003 『八日市地方遺跡I』小松市教育委員会
横田洋三 2004 「準構造船ノート」『紀要』第17号、財団法人滋賀県文化財保護協会
横田洋三 2007 「弥生時代の舟」『海と弥生人～みえてきた青谷上寺地遺跡の姿～』鳥取県教育委員会
横田洋三 2012 「青谷上寺地遺跡出土の船」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告8 木製農工具・漁撈具』鳥取県埋
蔵文化財センター

【挿図の出典】第1・2図（君嶋編2012）

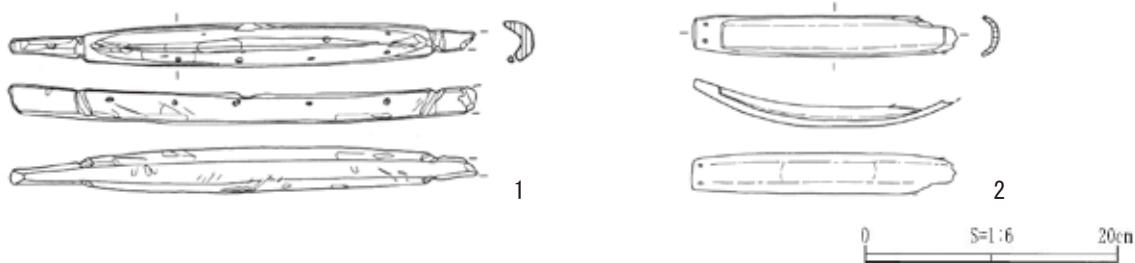
第3図1（鳥取県教育文化財団2001『青谷上寺地遺跡3』）、2（同2002『青谷上寺地遺跡4』）



第1図 青谷上寺地遺跡出土の実船資料 (S=1/20)



第2図 II型丸木舟の模式図



第3図 舟形木製品 (S=1/6)

第1表 青谷上寺地遺跡における船の利用景観 (横田 2012 を基に作成)

舟のタイプ	大きさ	使用場所	用途
堅板型準構造船 (I型)	20m級 (大型船)	外洋	遠方沿岸 (九州~北陸)、朝鮮半島との交易
丸木舟 (II型)	12m級 (中型船)	近海	外洋魚の捕獲、近隣沿岸集落との交通手段
	6m級 (小型船)	潟湖・水路	漁撈・運搬・農耕用

福井県三方五湖周辺における舟と水上交通 －縄文時代～平安時代の出土資料から－

小島 秀彰（若狭三方縄文博物館）

はじめに

三方五湖周辺域は、若狭地方の中央に位置し、福井県若狭町と美浜町に属するが、滋賀県境と隣接・京都府境と近接しており、古来、これらの地域とのつながりも深い。本稿では、環日本海域に限らず、舟と水上交通の面で、これらの地域との関連性についても触れたい。

出土資料（第1・2図）

三方五湖周辺遺跡で丸木舟を出土したのは、鳥浜貝塚（縄文時代前期1艘・後期頃1艘）及びユリ遺跡（縄文時代後晩期9艘）である。各舟に共通する特徴としては、①いずれもつくりが浅い②材質がスギである③当時の湖岸（古三方湖岸）付近で出土していることである。

櫂は、鳥浜貝塚（縄文時代前期）、北寺遺跡（同後期）、ユリ遺跡（縄文時代晩期末・弥生時代後期～古墳時代）、田名遺跡（弥生時代後期～古墳時代）、江跨遺跡（同）から出土した。時代を超えて同一形態の櫂が存続しているが、羽子板形の柄頭は、縄文時代に特有である。また舟形木製品は、田名遺跡（9世紀後半以降）及び角谷遺跡（平安時代以降）で報告されている。

三方五湖周辺の水上交通

三方五湖のうち三方湖・水月湖・菅湖周辺は、近世までは、ほぼ淡水域であった。今のところ、出土資料から詳細に論じられるのは、この内水面交通に限られる。当地域の丸木舟の内面は、舷側の高さが16～25cm程度と低く、舟体の割り方が浅い。特に縄文時代後期以降の丸木舟は、舟底をほとんど加工しない丸底のものと、平底のものとが併用されており、後者はより水深の浅い湖沼や河川での利用が想定される（清水編2012）。出土舟による交通もこれらの淡水域に留まっていた可能性が高い。

また、首都大学東京と若狭三方縄文博物館が共同で実施した、丸木舟復元実験（小林・山田2011）での所見によると、適正な定員は、縄文時代前期の鳥浜貝塚1号丸木舟復元舟（丸底）で4名、同後期のユリ遺跡1号丸木舟復元舟（平底）で2名である。前者を実際に漕いでみると、左右にローリングはするものの、湖沼や河川における通常の乗船で、舟内に水が浸入することはなかった。一方、後者は波のない河川において1名で漕いだ場合でも、櫂による水しぶきが舟内に常に浸入するため、遠距離の航行や外洋での利用を想定しにくい形態であると言える。

よって、舟の形態と実験結果に基づけば、縄文時代の三方五湖周辺における出土舟は、内水面交通向きであり、特に後期以降は、近隣での移動に重きを置いていたと想定できる。

一方、弥生時代以降の状況については、実際に利用された出土舟そのものが存在しないため、議論の幅は少ない。平安時代の舟形木製品の形態を見ると、縄文時代のユリ遺跡出土舟から大きな変化が見られないことに気付く。つまり、舟体の割り方が浅く、ほぼ平底で、舷側が低い点が共通している。祭祀に利用された非実用品ながら、実用舟を忠実に模した木製品であることから、これらの形態が縄文時代後期以降、広く内水面交通に用いられた舟の形態であったと推定できる。

一方、外洋に面した若狭湾はリアス式海岸が続く地形である。海岸に近接した場所に分布する遺跡の発掘調査例は少なく、分布調査で確認できるのは製塩遺跡や散布地がほとんどである。一方、海産物が出土するため、間接的に外洋での活動を論じられる内陸側の遺跡として、鳥浜貝塚（マグロ属、マダイ亜科、ブリ属、サザエ等の動物遺体出土）、北寺遺跡（マグロ属出土）などが挙げられる（小島2007）。これらの遺跡や近隣で出土した丸木舟は、先述のように内水面向きであることから、外洋

向きの別の丸木舟や漁港にあたる遺跡の存在が想定できるが、今のところ、これらを伴う遺跡は当該地域では未発見である。古墳時代以降、若狭湾岸には製塩遺跡が多く出現し、古代から平安時代まで遺跡が存続する場所もある。若狭湾岸の小川遺跡(古墳時代)では製塩土器や石錘なども出土しており、製塩を行いつつ、外洋で漁撈も行っていたと考えられる。

近世以降の若狭湾岸では、京都という大消費地を背後に抱え、「京は遠ても十八里」などと言われるように、人手によって一昼夜で鮮魚類を運搬することが可能であった。田名遺跡では、調塩の付札木簡も出土しており、藤原宮跡や平城宮跡でも、三方郡関係の付札木簡が出土している(田辺編1988)。少なくとも製塩の始まる古墳時代以降近世に至るまで、若狭地方と近畿地方とを結ぶ海産物流通があったと考えられ、船(舟)は海から漁村までの海産物の移送という最初の役割を担っていたと考えられる。ただし、塩を使った海産物の保存・貯蔵法の導入以前は、基本的に地産地消を基本とした生業・運搬に船(舟)が利用されていたと推定される。

隣接地域との関係

琵琶湖及び内湖を有する滋賀県域では、縄文時代の丸木舟が30艘以上と、日本最多の出土数を誇る(財滋賀県文化財保護協会編2007)。分布的には、湖北、湖東、湖西に拡がり、特に内湖が存在した湖東・湖北方面からの出土例が多い。時期的には、縄文時代中期に出現し、後晩期にその出土例を増加させる。利用場所としては、当然のことながら内水面に限定されている。なお、丸底の舟と平底の舟、横帶を持つものと持たないものとが同時期に併存するのは、若狭地方と共通している。

京都府では、舞鶴市で1例、向日市で2例の出土が報告されている(財滋賀県文化財保護協会編2007)。特に舞鶴市浦入遺跡出土舟(縄文時代前期中葉)は若狭湾に面した内湾の砂浜からの出土であり、外洋航行を目的とした舟として貴重な出土例である。最大幅約90cm、舷側の高さ40cmを測る。現存長は約500cmであるが、復元すれば800cm以上となり、内水面用の丸木舟とは規模が全く異なっている。ただし鳥浜貝塚の舟とよく似た形態であり、少なくとも縄文前期中葉の時点で、同形の舟が若狭湾近隣で外洋交通に利用されていたことの証左である。

おわりに

三方五湖における内水面中心の水上交通は、近世以後も、自動車による流通がスタートするまで、鉄道と組み合わされた形で継続していた。例えば、湖岸での農作業に舟を使い、渡船という形で人々の足となり、漁獲物、生産物、食料品、日用品等の一切の輸送手段となっていた(三方町立郷土資料館編1987・三方古文書を読む会編1990)。三方五湖周辺域では、重量物も問題なく運搬できる乗り物として、永い間、舟が有効に機能していたのである。

【引用・参考文献】

小島秀彰 2007 「外洋性漁撈活動の存在へ評価－鳥浜貝塚における縄文時代前期の「痕跡」の検討－」『縄紋時代の社会考古学』 同成社

小林加奈・山田昌久 2011 「縄文時代丸木舟の復元製作実験」『人類誌集報2008・2009－遺跡資料の人類誌・実験考古学による人類誌－』 首都大学東京人類誌調査グループ

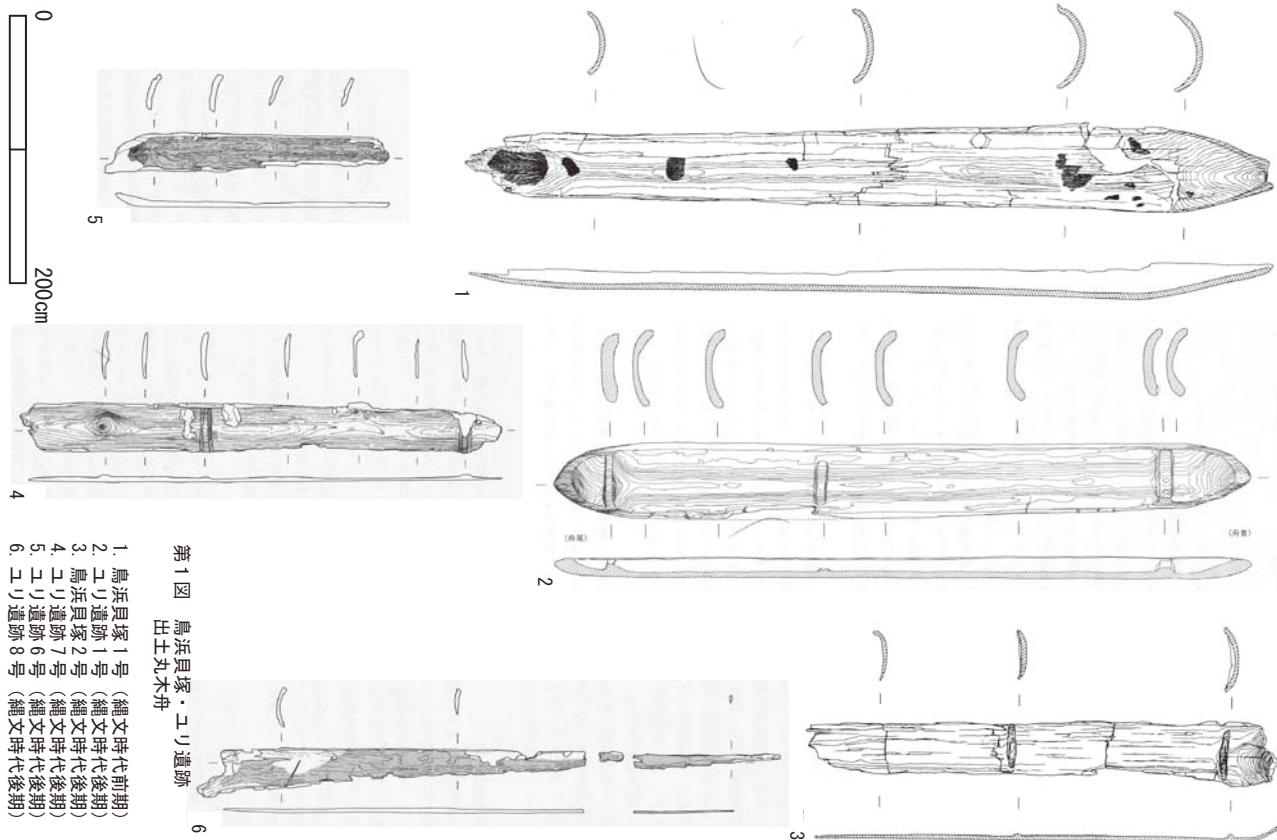
(財)滋賀県文化財保護協会編 2007 『丸木舟の時代－びわ湖と縄文人－』 サンライズ出版

清水孝之編 2012 『ユリ遺跡－舞鶴若狭自動車道建設事業に伴う調査－』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

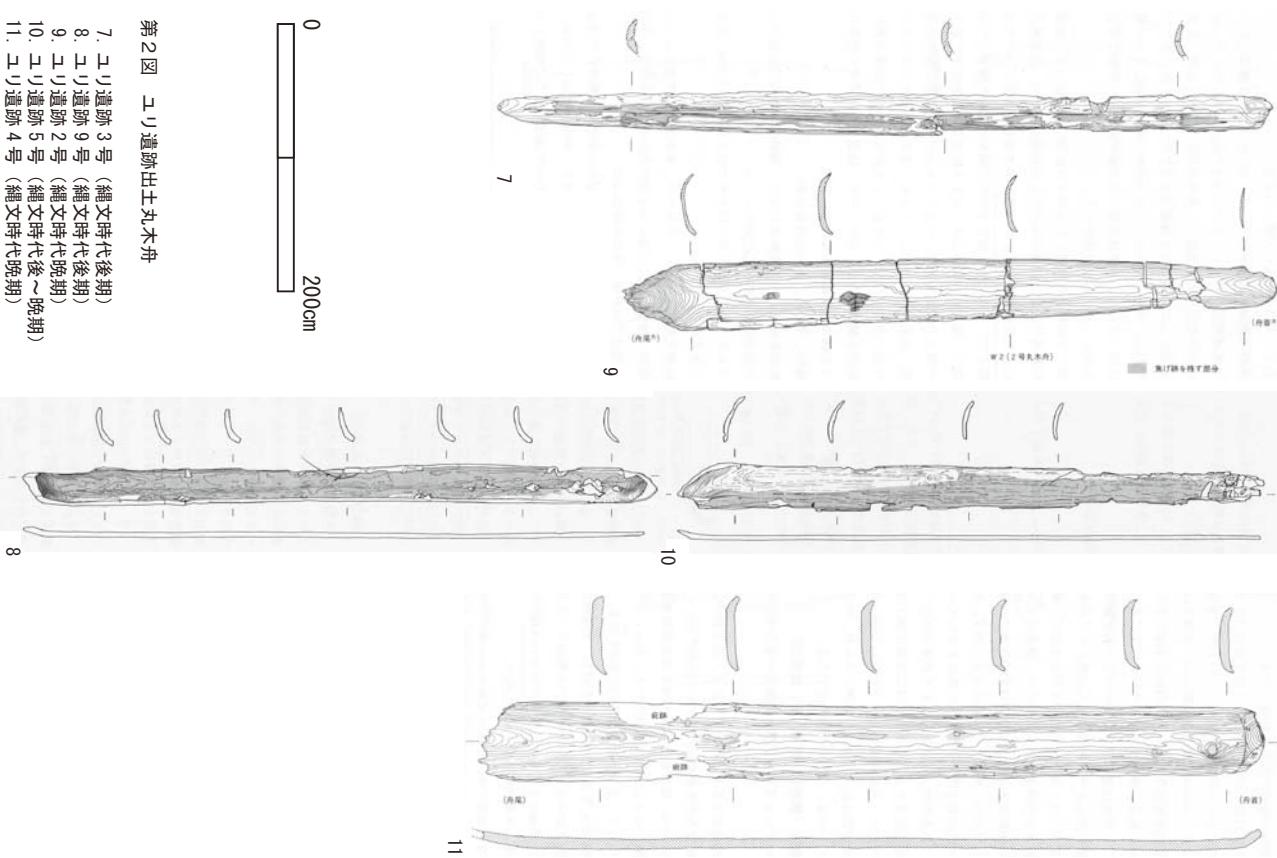
田辺常博編 1988 『田名遺跡』 三方町教育委員会

三方古文書を読む会編 1987 『三方歴史ブックレット② 三方五湖の漁業(上)－久々子湖と氣山川・浦見川－』 三方古文書を読む会・三方町立図書館

三方古文書を読む会編 1990 『三方歴史ブックレット③ 三方五湖の漁業(中)－三方・水月両湖と鯉川－』 三方古文書を読む会・三方町立図書館



第1図 鳥浜貝塚・ユリ遺跡
出土丸木舟



石川県内の船関係資料

金山 哲哉（公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）

県内資料について

舟（船）材 14 遺跡 52 点、櫂 14 遺跡 47 点、アカ取り 6 遺跡 13 点、舟形 43 遺跡 118 点、絵画資料 4 遺跡 4 点、合計 234 点を確認した。船本体の資料は、七尾市三室トクサ遺跡出土の縄文丸木舟 1 点を除き、他はすべて弥生時代以降の準構造船材であり、半数以上が井戸側転用材として出土している。櫂については、最も古い資料では七尾市三引遺跡の縄文時代早期末～前期初頭まで遡ることができる。アカ取りは出土点数が少なく、形態的に農具のもみすくいとの区別の問題があり注意を要する。最も資料点数の多いのが舟形であり、関係資料の半数を占める。材質別では、木製品が 108 点、土製品が 9 点、金属製が 1 点となっている。弥生時代から確認され、時代ごとの形状の変化が注目される。絵画資料は、遺物（土器、琴板）、遺構（横穴壁面）に描かれたものの 2 種が確認された。

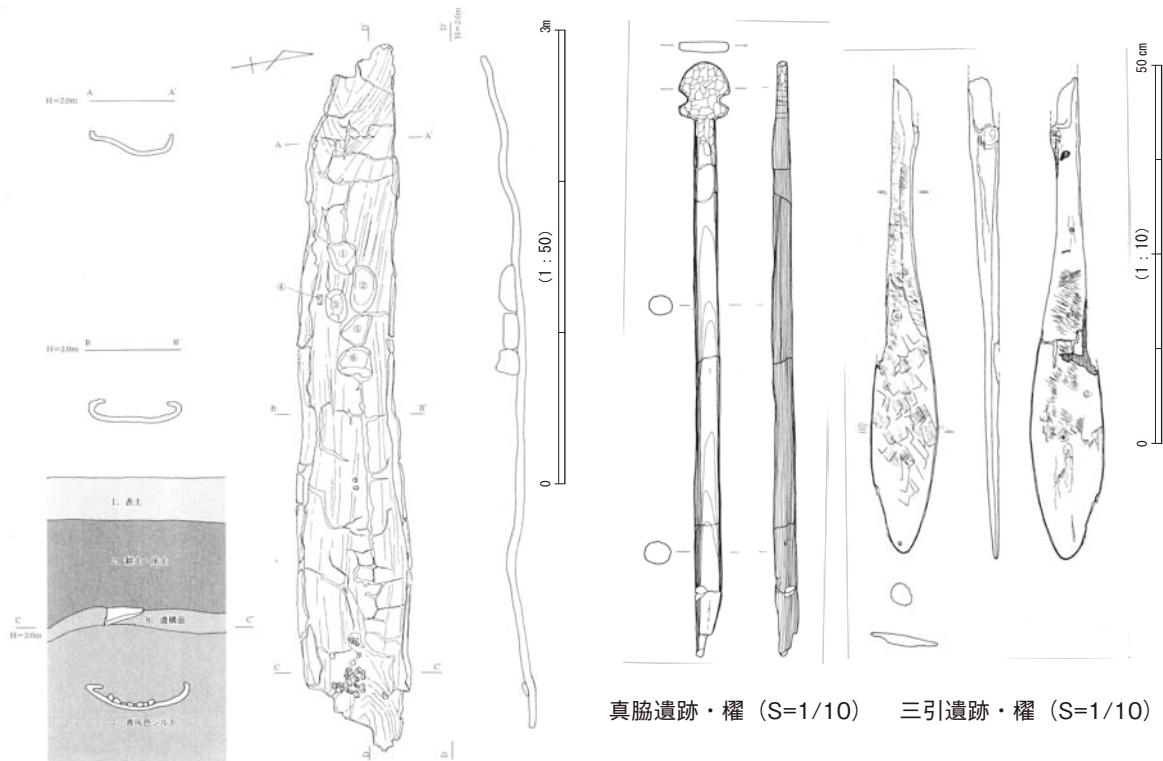
各時代の船と水上交通

七尾市三室トクサ遺跡出土丸木舟（縄文時代前～中期）は、舷側板をもたない縄文時代の単材刳舟である。能登町真脇遺跡や七尾市三引遺跡の櫂の出土例から、縄文時代前期にはこれらの遺跡の前面に広がる内湾を舞台に、丸木舟を用いた活発な漁労活動が展開していたものと考えられる。

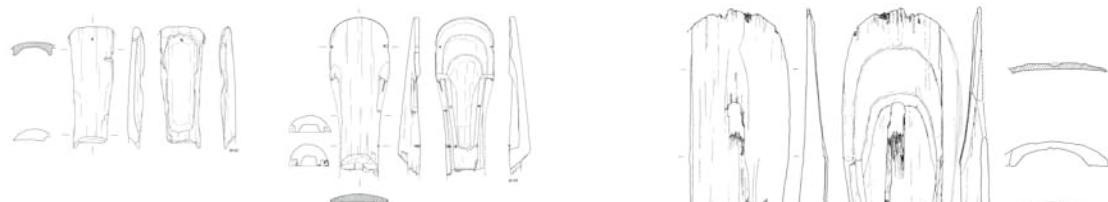
丸木舟は弥生時代においても使い続けられたと考えられるが、同後期以降の舟形に、舷側板を取り付けるためとみられる穿孔を船べり部分に施した資料や、船首尾に堅板を意識した切り込みを施した資料など、準構造船を模した資料が確認されるようになる。金沢市畝田西遺跡群出土の舟形の部材とみられる堅板（古墳時代前期）は、実物の堅板を小型化したかのように精緻に作り込まれたものである。実船資料でも、加賀市猫橋遺跡の舷側板（弥生時代終末）や、小松市千代能美遺跡の堅板（古墳時代前期）などの船材が出土しており、弥生時代後期～古墳時代前期の加賀地域には堅板型の準構造船が出現していたものと考えられる。これらの船が外洋を目指したか否かは不明とせざるを得ないが、出土遺跡を拠点に活躍したであろうことは想像に難くない。

古墳時代以降の船材資料は、井戸枠転用の船底部が主体となる。これらの船底部には弥生時代同様に丸木舟が用いられ、船べりに舷側板を取り付けるためとみられる加工（端部の平坦化、方形のホゾ孔等）が施されている。民俗例にみられるような、木材を接合するチキリ技術は弥生時代後期には既に確立していたと考えられるが、造船にチキリを用いた例は確認できない。その他の造船技術についても、小松市額見町遺跡出土の船底部（平安時代）に船梁とみられるホゾ孔が確認されるのみであり、中世に至るまで船底材の加工痕跡からみえる造船技術に大きな変化はない。一方で、形状を変化させているのが舟形である。古墳時代にはその殆どが船首尾ともに尖る平面形であった舟形が、奈良・平安時代以降、舳先は尖るもの、艤部は角形を呈する平面形状のものが現われ、中世にはほぼ例外なく同形状を呈するようになる。このような船尾形状の変化は、櫂から櫓への推進具の変化を物語ると考えられるが、現在の船材資料では欠落した部分であり、現段階ではその可否を明らかにし得ない。

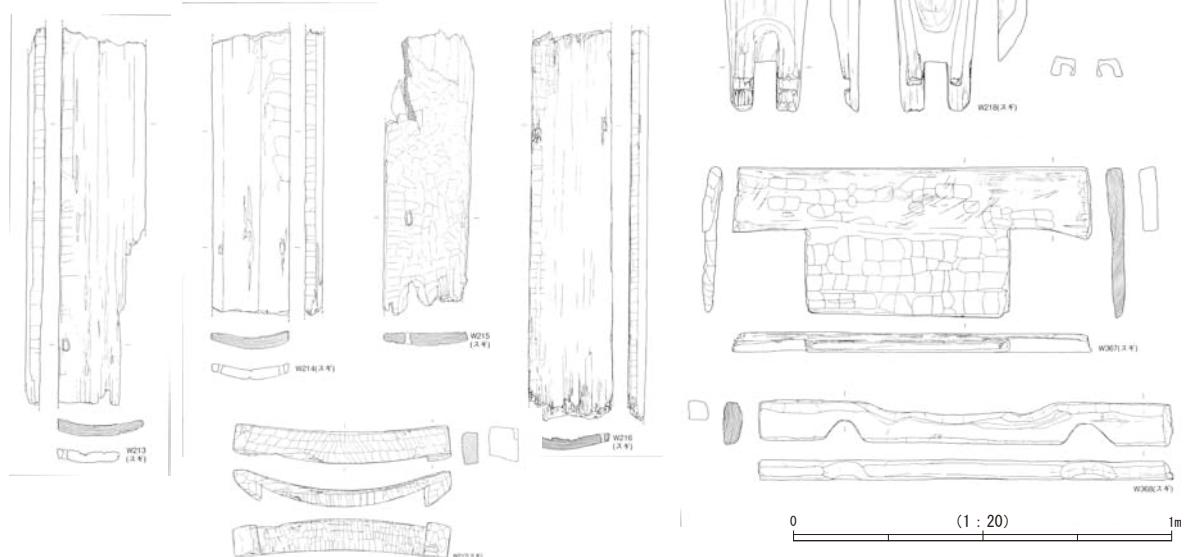
文献史料上の古代能登には、ヤマト王権によって設置された造船を職掌とする船木氏の分布が散見され、同氏により東国征討のための軍船を建造された可能性が指摘されている。彼らがその素地となつたかは定かではないが、大伴家持の能登巡行の移動手段に船を含め得る交通環境は、家持の歌から察せられる能登の盛んな造船活動を背景にもたらされたものであろう。弥生～古墳時代の堅板型準構造船にも増して、古代～中世の船は資料が少なく不明な点が多い。舟形にみえる形状変化を確認できるような、実船資料の増加が期待される。



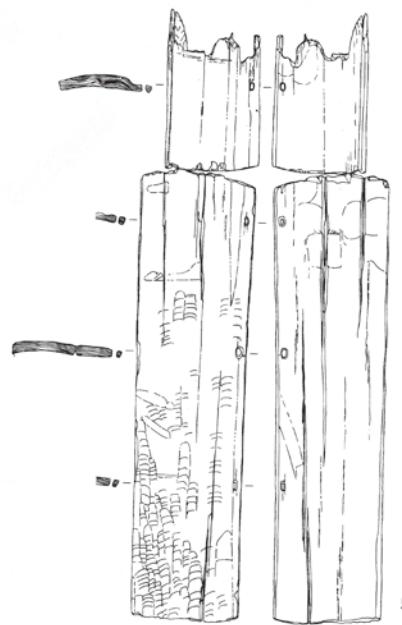
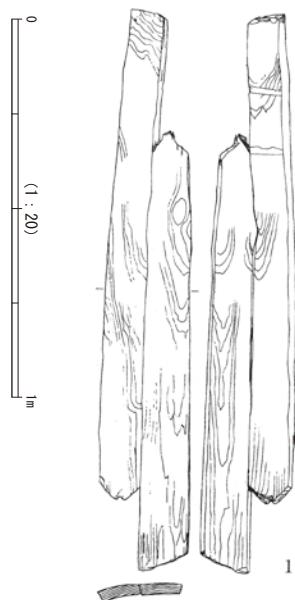
三室トクサ遺跡・丸木舟 (S=1/50)



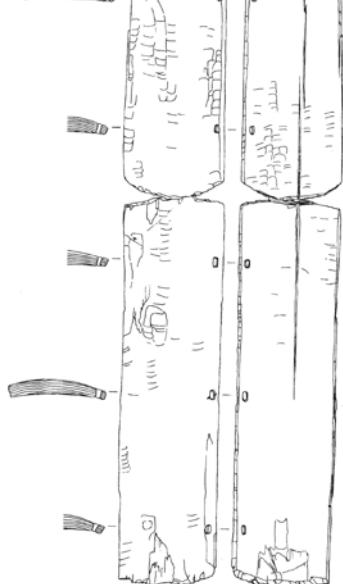
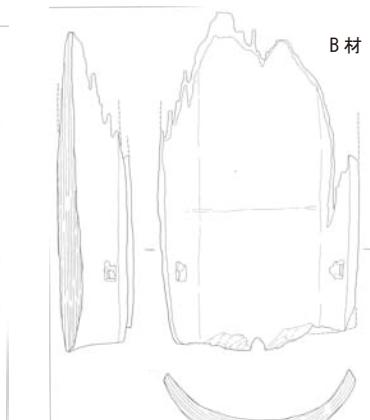
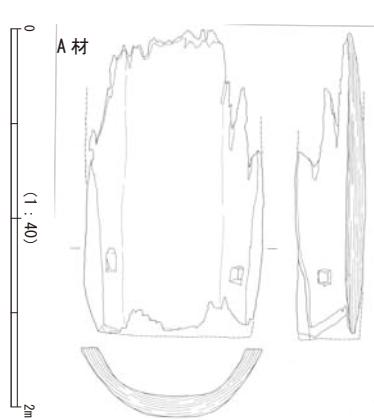
畠田西遺跡群・竪板 (舟形) (S=1/20)



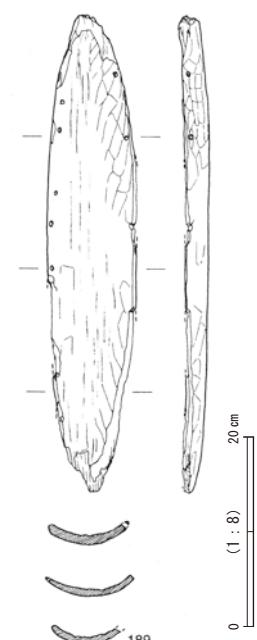
千代・能美遺跡・竪板ほか、準構造船材 (S=1/20)



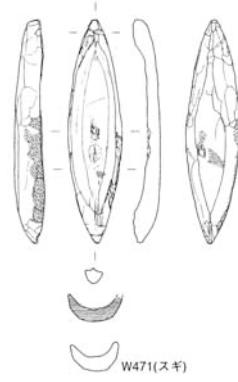
1・5・6：猫橋遺跡・準構造船材（舷側板）(S=1/20)



額見町遺跡・準構造船材（船底部）(S=1/40)



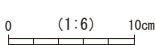
梅田B遺跡・舟形 (S=1/8)



千代・能美遺跡
・舟形 (S=1/6)



田尻シンペイダン遺跡
・舟形 (S=1/6)



上町カイダ遺跡
・舟形 (S=1/6)

富山県の出土船について

廣瀬 直樹（氷見市教育委員会）

はじめに

日本の船は、丸太を割って造る単材丸木舟から複数の刳材を前後や左右に継いだ複材丸木舟へ、さらに刳材に板を接ぎ合わせた準構造船、板材で造る構造船へと変化してきた。単材丸木舟では、材料となる丸太の大きさによって船の大きさも制限されてしまうが、船の使用目的である運搬や人の移動、あるいは漁撈のためには、より大型化して積載量を増やしてやる必要があった。そのため単材丸木舟から、大型化、構造船化の方向で変化する、というのが大きな流れである。古くから漁業が盛んであり、オモキ造りなど在地の造船技術が発達した富山県においても、同様の発達過程が想定されるが、船の出土例は少ない。ただ、平成15年度に氷見市鞍川D遺跡で12世紀代の丸木舟が出土して以降、能越自動車道や北陸新幹線の整備に伴う発掘調査で縄文時代の丸木舟の出土が相次いだ（第1図）。

縄文時代

縄文海進期の湾奥部に形成された縄文時代早期から後期の貝塚、氷見市上久津呂中屋遺跡でスギ製の丸木舟断片が出土しており、放射性炭素年代で縄文時代中期後葉のものという。箱型の横断面は近代の川舟や潟舟にも通じ、遺跡の立地から潟湖化した元の入り江で使用されたものと推測される。

富山市小竹貝塚では、丸木舟の先端部分約2.6mが出土している。縄文時代前期中葉の低湿地板敷遺構に転用されたもので、端部左右両側に施された蕨手形の加工が特徴的である。詳細については報告書の刊行を待たなければならないが、後に放生津潟となる入り江の奥部で使用されたものだろうか。

弥生時代から古墳時代

丸木舟の複材化、大型化が進む弥生時代であるが、富山県内では船に関する情報はほとんどない。現時点では、富山市豊田大塚・中吉原遺跡で、弥生時代後期から終末期の沼跡より伏せた状態の舟が出土したと報告されているのが唯一の例である。

古墳時代も船の出土はないが、一方で日本海を介した交易の一端がうかがえる遺跡がある。氷見市の国指定史跡、柳田布尾山古墳（全長107.5m）は、日本海に面する地域に築造された前方後方墳としては最大の規模を持つ。富山湾を望む丘陵上に立地し、海岸線と平行に築造されていること、築造当時の古墳直下には潟湖があり、天然の港として活用されていたと推測されることから、富山湾を基盤に海上交通を掌握した広域首長連合の長という被葬者像が想像される。同じく氷見市の朝日長山古墳では、朝鮮半島の伽耶地域の系譜を引く冠帽や馬具の剣菱形杏葉が出土している。被葬者は富山湾に君臨する国際派の地域首長連合の一員であり、その勢力基盤が富山湾のみならずコシの海域を対象とした海人の交易活動にあった、とされる。こうした古墳時代の首長たちの動向には、積載性に有利な準構造船形式の船を利用した海上交易が想定されるが、その物的な証拠となるものはない。

古代

『万葉集』の編者、大伴家持が越中国守として赴任していた天平18年（746）から天平勝宝3年（751）の5年間、家持は氷見に所在した潟湖、布勢水海に舟を浮かべて遊覧し、舟や舟人、海人を歌に詠んでいるが、舟自体への具体的な言及はない。一方、『万葉集』には8世紀前半頃に詠まれた三首の歌に「棚無し小舟」という語がある。「棚」とは棚板、つまり舷側板で、それが無い単材の丸木舟を指す。この「棚無し小舟」という言葉から、小舟ではない大型の船は棚板が設けられた準構造船形式の船だったことが読み取れ、また奈良時代には丸木舟と準構造船が並存していたと推測できる（第2図）。

県内では、高岡市東木津遺跡で溝の護岸に用いられた板材が、切り欠きや等間隔に並ぶ穴の加工か

ら準構造船の棚板を転用した可能性が指摘されている。溝から8世紀前半～9世紀代の遺物が出土しているため、板材は8世紀前半以前のものであろう。溝跡出土の8世紀代の須恵器には、「船木」の墨書きが残るものがあり、造船に関連すると推測される能登国氏族、船木氏との関連が想定される。

平安時代末～中世

平安時代末から中世の資料として、井戸側に転用された丸木舟の出土が氷見市で2例ある。

鞍川D遺跡は、氷見市の中央を流れる上庄川の下流南岸に位置する。丸木舟は輪切りの2部材を組み合わせて井戸側に転用してあった（第3・4図）。スギ製で、丸木舟製作時の工具痕や、埋木・カスガイ等の補修痕、井戸側転用時の鋸痕、フナクイムシやキクイムシによる食害痕が残る。食害痕は底面のみで舷側外面にはないが、これは舟の喫水が非常に浅かった証拠となる。また、フナクイムシなどの食害痕の存在は、海水域から汽水域、すなわち海から河口部にかけて使用・繫留されていたことを示す。放射性炭素年代測定では11～12世紀代、井戸の構築が13世紀前半であることから、丸木舟の建造は12世紀代以前と推測される。船首側の（a）舷側上部には「コ」の字形の切り欠きと方形孔があり、船梁や波除板が設けられていたものと推測される。また底内面の不整形の埋木は、フナクイムシなどによる食害で開いた穴をふさいだものであろう。船尾側の（b）は、井戸側転用前にすでに割れが生じていたようで、それをカスガイで接合してあった。舷側上部には方形孔が複数あり、一部には縄をかけたために生じた磨耗痕が残る。これは櫓櫂をかける早緒の跡と、舷側上部に構造物を固定するための縄の跡が混在しているものとみられる。（a）と（b）は断面形状が大きく異なっており、丸底で深い（a）と平底気味で浅い（b）をつなぐには、中間部分に最低でも4m程度必要となる。船首・船尾部分も含めると、丸木舟の全長は10m程度と推測され、これは単材丸木舟としては大型の部類となる。第5図は、日本海側の古代から中世の出土丸木舟をサンプルとした幅と深さの分布図だが、全体に幅と深さの比が2:1に集中するのに対し、鞍川D遺跡例は（a）（b）ともに1.4:1となり、幅に対して深いという特徴がある。船体の深さや船底の厚さは、海での操船や波切りの面で有利であり、もうひとつの特徴である喫水線の浅さによって大量の積荷が可能だったと推測される。

鞍川D遺跡の南西約1.7km、同じく上庄川南側平野部に立地する中尾新保谷内遺跡で井戸側に転用された丸木舟もスギ製で、幅と深さの比は1.8:1と鞍川D遺跡例と比べてやや平底気味の形状を持つ。井戸は12世紀後半～13世紀前半、丸木舟の放射性炭素年代は8～10世紀を示す。外面にフナクイムシないしキクイムシによる食害痕があり、鞍川D遺跡例と同様、海で使用されたと考えられる。

近世以降の動向

14世紀には縦挽きの製材用鋸が出現し、本格的な構造船の時代が到来する。日本海沿岸ではオモキ造りと総称される船体構造とその建造技術が発達し、近世にはその存在が確認される。オモキ造りは準構造船に分類されるもので、船底部左右両端にオモキと称する刳材を用いた平底の船形、接合に木製カスガイのチキリや木栓のタタラ、接着剤としてウルシを用いるという共通点がある。近世前半期の日本海海運を担った北国船や羽賀瀬船もオモキ造りだったが、櫓櫂による操船に多数の水主が必要なため、帆走性能に優れた弁才船の普及により18世紀には衰退した。だが、定置網や地曳網などの沿岸漁業ではオモキ造りの船が存続し、富山湾から能登半島内浦では、定置網漁の網船にオモキ造りの大型船ドブネが使用された（第6図）。昭和30年代まで活躍したドブネだが、より操船しやすく動力化も可能だった板合わせの構造船テントに取って代わられ、そのテントもFRPなど新素材の船の普及により昭和40年代には姿を消した。日本列島全体では、男鹿半島などで単材丸木舟が存続し、津軽海峡にムダマハギ、日本海沿岸にオモキ造りといった準構造船があったように、木造船が終焉を迎える近年まで丸木舟、準構造船、構造船が並存していたということは強調しておく必要があるだろう。

【引用・参考文献】

公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2013 『上久津呂中屋遺跡発掘調査報告 一能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告X-1』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2009 『中尾茅戸遺跡 中尾新保谷内遺跡 神明北遺跡 大野江淵遺跡 発掘調査報告 一能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告VIII-1』

高岡市教育委員会 2001 『石塚遺跡・東木津遺跡調査報告』

富山県埋蔵文化財センター 2011 『特別展図録 とやまの貝塚 一貝塚からみえてくる縄文人の姿と生活-』

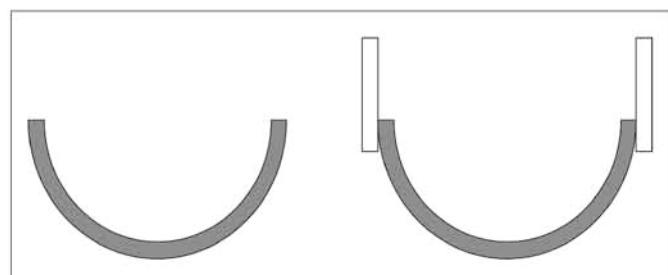
富山市教育委員会 1998 『富山市豊田大塚遺跡発掘調査概要』

氷見市 2002 『氷見市史』 資料編5 考古

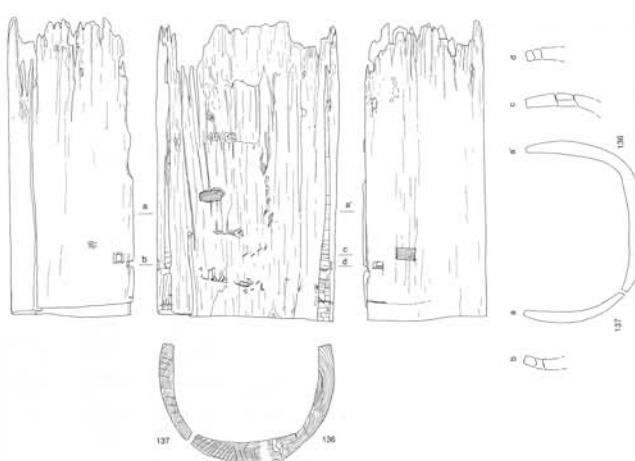
氷見市教育委員会 2006 『鞍川D遺跡 鞍川バイパス遺跡群発掘調査報告II』

廣瀬直樹 2005 「鞍川D遺跡出土の丸木舟 -出土丸木舟に残る加工痕・使用痕への試論-」『船をつくる、つたえる和船建造技術を後世に伝える会調査報告書』

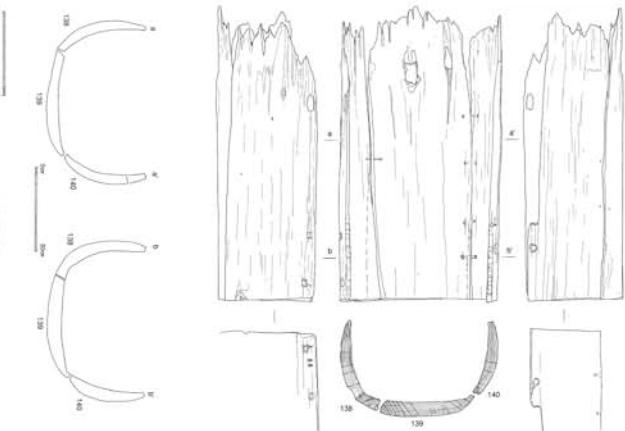
藤田富士夫 2002 「朝日長山古墳出土の金銅製品とその意義」『氷見市史』資料編5 考古 氷見市



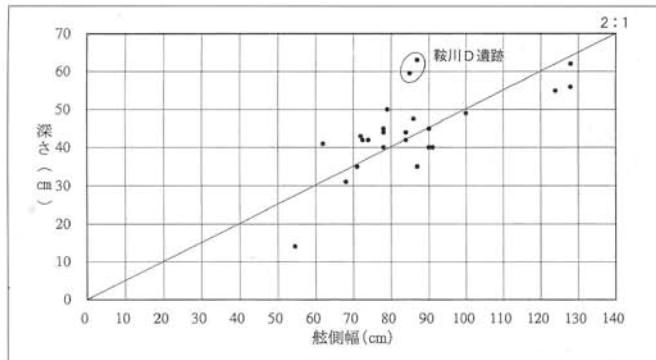
第1図 関連遺跡位置図



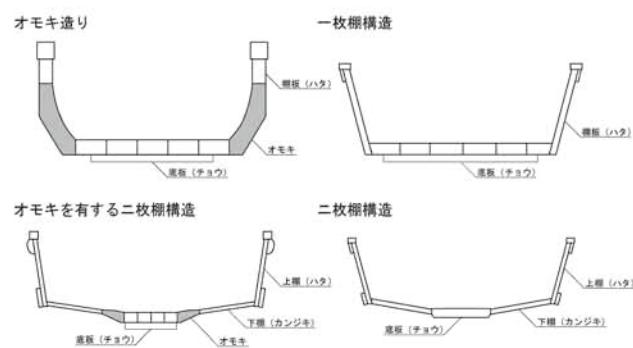
第3図 鞍川D遺跡出土丸木舟 (a) 実測図



第4図 鞍川D遺跡出土丸木舟 (b) 実測図



第5図 日本海沿岸地域出土丸木舟の深さと幅



第6図 富山湾周辺地域の和船断面模式図

新潟県における舟と水上交通

岩野 邦康（新潟市新津鉄道資料館）

はじめに

新潟県では1990年代以降、舟・水上交通に関する発掘事例が増えている。従来の発掘成果とそれらを俯瞰し整理した研究を鶴巻康志が行っている（鶴巻1999,2006）。本稿では鶴巻の整理に依拠し、あわせて発表者の主たる関心領域である新潟県下越地方の平野部における木造船の民俗例を紹介する。

出土した丸木舟・舟材

新潟県内では、中～下越地方の信濃川・阿賀野川下流域での出土例が多く、上越・佐渡地方の出土例が少ない傾向がある。また、ほとんどの事例が井戸枠に転用された材であるため、船首・船尾構造が推測できるものは少ない。

【縄文時代】

縄文時代晩期末の丸木舟が②青田遺跡（丸数字は図1、表1と対応）から出土している。山田昌久は、この船の特徴として、1. 船底部が平坦にカットされているということ、2. 船体の作りが薄いことを上げている（山田2004）。

【弥生時代】

④加治川分水路開削工事の際、1923（大正12）年に船底材が出土している（鶴巻1999）。割り残しの横梁構造をもつ。

【古墳時代】

船底の可能性のある転用材が⑥腰廻遺跡から出土している。

【奈良平安時代】

ホゾ穴、チキリ穴、釘穴、カスガイ痕のある井戸枠転用舟材が出土している。（⑤曾根遺跡、⑨小丸山遺跡、⑭沖ノ羽遺跡⑯半ノ木遺跡、⑮木崎山遺跡）。⑯古川遺跡（図5）のものは割り残しの横梁構造をもつ。⑫川根A遺跡からは1951（昭和26）年に古代の丸木舟が出土している。

【鎌倉室町時代】

タタラ穴、ホゾ穴、釘穴痕のある井戸枠に転用された舟材が出土している。（⑦下前川原遺跡、⑧山木戸遺跡、③住吉遺跡）。

【江戸時代】

⑯馬場屋敷遺跡から板舟の側板を転用した井戸枠が出土している。舟釘、チキリなどが使用されており、民俗例のイタアワセ、ナガフネなどの板舟と同じ技術を用いたものである。

水上交通関係の遺構

①蔵ノ坪遺跡からは平安時代の「津」の文字のある墨書き土器、「少目御館米五斗」「□□□□所信」の文言のある荷札木簡が出土しており、荷札のついた米俵は、他所から紫雲寺潟を利用して船で運ばれてきたものと考えられている。

⑩駒首潟遺跡・⑯門前遺跡などの川岸に位置する遺跡では、平安時代の建物の遺構とともにテラス状の平坦面が見つかっている。これらは荷揚げ、荷さばきを行う河岸的な役割を担っていた可能性が高い。

舟の構造（その変遷）や使用形態、造船技術—蒲原平野の民俗例から

越後の木造和船の特徴として、海岸部、内水面ともに刳材を使用するオモキ造りの船と板舟が併存していた点があげられる（表2）。

【ナガシブネの板船化】

赤羽正春はもともとオモキ造りの船だった阿賀野川河口のナガシブネが、オモキの位置に角材を利用することによって板舟化していったことを報告している。刳舟が板舟に変化していく事例として興味深い。信濃川河口のチョロ（オモキ造り）と阿賀野川河口のナガシブネは歴史博物館2007）、前者は新潟市歴史博物館が、後者は新潟市北区郷土博物館がFRPで巻かれた状態の船を収蔵している。なんらかの方法で断面構造を比較したい。

【点在する刳舟型田舟】

蒲原平野に広がる湿田地帯では、農家が家ごとにイタアワセを所有し使用する「船農業」が近世期の新田開発以降に発達した。湿田の中で稲を運搬する大型の田舟であるキツォは、イタアワセと同じ一枚棚構造である。ところが蒲原平野各地の博物館・資料館に、刳る技法のみで製作したキツォ（刳舟型田舟）が収蔵されている。現在出土例、民俗例などからこの舟の分布・使用形態について調査している。

【下越地方の刳舟と板舟の分布】

下越地方の民俗例では、阿賀野川河口より北にオモキ造りの海船がない。北蒲原郡海岸部より北には、一本水押二枚棚構造のカワサキ型の海船のみが分布している。一方、阿賀野川河口より西側には、ナガシブネ、チョロ、ドブネなどのオモキづくりの海船が分布している。オモキづくりではないが、船首、船尾の構造に刳舟の痕跡と思われる特徴をもつマルキも多数使用されていた。

内水面に目を転ずると、胎内川・加治川流域より北は、川漁に使用する刳材を用いたカワフネが分布し、南西には湿田地帯の農家が使用した一枚棚構造の板舟であるイタアワセが分布している。こういった分布状況は、造船技術というよりも、船に対する需給バランスが大きな影響を与えていたと考えられる。

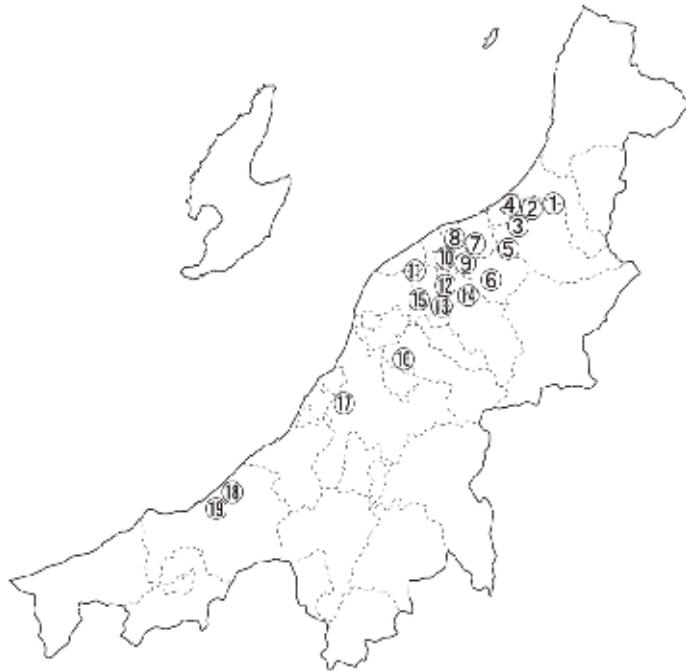


図1 新潟県内の出土事例

表1 新潟県内の出土事例

No	遺跡名	所在地	出土資料・遺構	時代・特徴・備考
①	藏ノ坪遺跡	胎内市(旧中条町)船戸	「津」の墨書き器・荷札木簡	平安時代
②	青田遺跡	新発田市(旧加治川村)金塚	丸木舟	縄文晚期
③	住吉遺跡	新発田市(旧紫雲寺町)中島	井戸枠転用舟材	鎌倉時代(13~14C前半)
④	次第浜 (加治川分水路)	新発田市次第浜	丸木舟	弥生~古墳初
⑤	曾根遺跡	新発田市(旧豊浦町)竹俣万代	井戸枠転用舟材	平安時代(9C)チキリ
⑥	腰廻遺跡	阿賀野市(旧笛神村)山倉	転用舟材	古墳時代
⑦	下前川原遺跡	新潟市北区(旧豊栄市)三ツ森川原	井戸枠転用舟材	鎌倉時代(13C)舷側のホゾ穴など
⑧	山木戸遺跡	新潟市東区山木戸	井戸枠転用舟材	鎌倉時代(14C中葉)。タタラ。釘穴など
⑨	小丸山遺跡	新潟市江南区大江山	井戸枠転用舟材	平安時代(9~10C)チキリ。釘穴など
⑩	駒首潟	新潟市江南区(旧亀田町)亀田新通	テラス状遺構	平安時代(9C)
⑪	緒立C遺跡	新潟市西区黒鳥	井戸枠転用舟材	古代
⑫	川根A遺跡	新潟市秋葉区(旧新津市)川根	丸木舟	古代?
⑬	*大沢谷内遺跡	新潟市秋葉区(旧小須戸町)	井戸枠転用舟材	鎌倉時代。現地説明会資料より
⑭	沖ノ羽遺跡	新潟市秋葉区(旧新津市)	井戸枠転用舟材	平安時代(9C)
⑮	馬場屋敷遺跡	新潟市南区(旧白根市)庄瀬	井戸枠転用舟材	江戸時代(19C)。板船
⑯	半ノ木遺跡	三条市(旧栄村)岡野新田	井戸枠転用舟材	平安時代(9C)ホゾ穴
⑰	門新遺跡	長岡市(旧和島村)上桐	テラス状遺構。延長6年漆紙文書	平安時代(10C)
⑱	木崎山遺跡	上越市吉川区	井戸枠転用舟材	平安時代。カスガイによる補修
⑲	古川遺跡	上越市吉川区(旧吉川町)大乗寺	井戸枠転用舟材	古代。横梁状剖残し

表2 蒲原平野の主な木造和船

1. 海の船

船型名	テンマ	マルキ	ドブネ	サンパ	テント	カワサキ	ベザイ
船首の構造	水押づくり	ジョー	ハナキリ※	水押づくり		水押づくり	
シキ・タナの構造	一枚棚	一枚棚	オモキづくり	二枚棚		三階づくり (タナ板が三枚)	

2. 河口の船

船型名	チヨロ	ナガシブネ
船首の構造	(オッタテか?)	(オッタテか?)
シキ・タナの構造	オモキづくり	オモキづくり

3. 内水面の船

船型名	オシアゲブネ	割舟型田舟	キツツオ	イタアワセ	ナガフネ	コウレンボウ
船首の構造	(オッタテづくり)	—	オッタテづくり			コウレンボウづくり
シキ・タナの構造	(一枚棚)	丸木舟	一枚棚			4枚の側板をア巴拉で支える構造

【参考文献】

赤羽正春 1981 「新潟県川舟造船技術の系譜—川舟から海船へ—」『民具マンスリー』14-9
 笹神村教育委員会編 2002 『腰廻遺跡』
 清水潤三 1955 「新潟県中蒲原郡川根丸木舟」『日本考古学年報』3
 新保誠吾 2000 『竹直下片南部遺跡・古川遺跡』吉川町教育委員会
 豊栄市教育委員会編 2004 『下前川原遺跡』
 鶴巻康志 1999 「加治川分水出土の丸木舟と弥生土器」『北越考古学』10
 鶴巻康志 2006 「新潟平野における古代・中世の割舟について」新潟考古学会談話会発表
 豊浦町教育委員会編 1981 『曾根遺跡 I』
 豊浦町教育委員会編 1982 『曾根遺跡 II』
 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団編 2002 『歳ノ坪遺跡』
 山田昌久 2004 『青田遺跡 本文・観察表編』新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団編
 新潟県教育委員会編 1973 『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』
 新潟県教育委員会編 1992 『木崎山遺跡』
 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団編 2003 『沖ノ羽遺跡 3 (C地区)』
 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団編 2004 『青田遺跡 図面図版編』
 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団編 2009 『西部遺跡IV・桜林遺跡III』
 新潟市教育委員会編 1987 『新潟市小丸山遺跡発掘調査概報』
 新潟市教育委員会編 2004 『新潟市山木戸遺跡』
 新潟市史編さん原始古代中世史部会編 1994 『新潟市史 資料編1 原始古代中世』
 新潟市埋蔵文化財センター編 2009 『駒首潟遺跡 第3・4次調査』
 新潟市歴史博物館 2007 『船と船大工』
 新津市教育委員会編 2000 『川根遺跡発掘調査報告書』
 古川百作 1982 「川根の丸木舟発掘」『新津郷土誌』9
 和島村教育委員会編 2005 『門新遺跡 谷地地区II』

秋田県における舟

伊藤 直子（男鹿市教育委員会）

1 はじめに

秋田県では、平成に入ってから、日本海沿岸自動車道の建設、圃場整備等に係る発掘調査により、沿岸部の調査が進み、低湿地の調査事例も増加した。木材、木製品、植物という当時の生活色を色濃く残す遺物も出土し、現存する民俗事例との比較なども可能となった。ここでは秋田県の沿岸地域の出土例、民俗事例を紹介する。

2 出土事例

秋田県の舟材や舟形の出土は、沿岸中央部の男鹿半島と旧八郎潟沿岸域に集中する。低湿地の調査が多いことが一因であるが、この地域は古くから湊、漁場として機能していた。男鹿半島は、東北日本海側では唯一の半島であり、いち早く目に入る陸地であった。八郎潟は男鹿半島の付け根から海へとつながり、この周辺は豊富な漁場、天然の良港として活用されていた。

古代には4～5世紀代の土壙墓群が八郎潟から北へ6kmの能代市寒川Ⅱ遺跡で確認され、その副葬品として続縄文時代の後北C式土器が出土した。その経路は明らかではないが北方交流があったことを示す。8世紀では、阿倍比羅夫が180艘の船団を連ねて秋田、能代、津軽、道南まで北上した齐明天皇4年(758)の遠征の記述（『日本書紀』）があり、現在の秋田市にある秋田湊とその経由地として男鹿半島や旧八郎潟もまた湊として機能していた。また、元慶2年(878)、秋田城が焼き討ちされた俘囚の反乱である元慶の乱では、旧八郎潟周辺から秋田城を襲撃している（『藤原保則伝』）。この際、相当数の舟を八郎潟周辺で調達していた。その八郎潟は、琵琶湖について2番目の広さの湖だったが、昭和30～40年代に干拓され、周囲の残存湖を残し陸地化されており、現在は大規模な水田地帯となっている。

■ 古代

八郎潟周辺域

- ・男鹿市の小谷地遺跡では第1次調査から9世紀代の舟形（秋田県指定有形文化財「小谷地遺跡出土品一括」）が出土し、立地は海岸線から2km、現八郎潟の西岸まで4kmの低い土地に広がる水田地帯。昭和30～40年代に板材が多数出土し埋没家屋跡として非常に注目された。また墨書土器や斎串など出土し、律令型の祭祀を行っていたことが指摘されている。埋没家屋跡としていた遺構は、平成21年の調査により水路の流量調節や水温を上げる等の機能を有した灌漑堰跡とされている。
- ・南秋田郡五城目町の中谷地遺跡（8世紀後半～9世紀）からは槽（田舟・小型の舟「きっと」）が出土した。前述の小谷地遺跡と八郎潟を挟んで向かい合い、墨書土器等で律令型の祭祀が指摘されている。河川跡から木製品が多数出土。堰跡も確認。中谷地・小谷地遺跡ともに秋田城跡から25km程度。

■ 中世

沿岸中央地域

- ・秋田市の後城遺跡（13～16世紀末）からは舟形が出土した。古代と中世の複合遺跡。古代は史跡秋田城跡に関連し、区画施設で囲まれた竪穴住居跡群など、8世紀前半～9世紀代の集落跡。中世は土坑墓群、掘立柱建物跡等の居住域、竪穴状の貯水施設が地区ごとに検出され、多数の木製品が出土。三津七湊のひとつ秋田湊に近接し、町並を形成した遺跡。室町時代に秋田湊を支配し日本海交易により栄えた湊安東氏と密接な関係を指摘。
- ・男鹿市の史跡脇本城跡（15～17世紀前）からは舟形が出土した。男鹿半島の南側付け根部分、脇本地区の海に面した標高100m前後の丘陵上に位置する城館跡。城域は150万m²と広大である。日本

海を拠点に勢力を広げた安東氏の居城であり中心地区の内館からは日本海と海岸線が一望できる。天正5年（1577）に、織田信長とも交流のあった安東愛季が大規模に改修したとの記録が残る。城からは貿易陶磁器（中国元・明、朝鮮）、国産陶器（瀬戸美濃・唐津）、金属製品（火縄銃の弾、武具、馬具など）等、多数出土。木製品は、城跡西側のお念堂地区から出土し、漁具の他、柱状塔婆、笠塔婆等という宗教的なものから生活用具一般まで多様。

八郎潟周辺域

・南秋田郡井川町の洲崎遺跡（13～16世紀）では丸木舟転用の井戸側・櫂が出土した。八郎潟の東岸に位置し、潟にそそぐ井川沿いに位置する。方二町の（約220m）の外周に堀を巡らせた大規模な集落跡。調査面積29,230m²（詳細調査9,350m²）であり、井戸跡数は312基とその多さは突出している。幅8mの南北道路を基軸とし、堀・溝・道路を整然と配置する。遺跡南西200mには船着き場の標柱が残る。陶磁器の他、多量の木製品や井戸材が出土した。

井戸側に転用された丸木舟

丸木舟を転用した井戸跡4基を検出。鋸や手斧で切断した丸木舟を向い合せて井戸側とし、内部に曲物を据えて水溜としている。うち2基の丸木舟は同一個体であり長さ12m程度、使用木材は樹齢300年以上と指摘されている。ちぎりや木栓が残る。

井戸側として転用された丸木舟1基には、裏込めとして舟に沿い半分に折られた状態で人魚木簡（秋田県指定有形文化財）が入れられていた。諸説あるが、津軽地方や秋田地方沿岸に出現した人魚とこれに対する人々の対応の様子について描かれた資料として、遺跡から出土した国内唯一のものである。丸木舟の転用とこの木簡は一連の井戸構築儀礼の可能性もある。

遺構No	構造	法量(cm)	切断	部位	舟形状	廃棄時行為	出土遺物	備考
1 SE04	丸木舟	最大幅124・内底幅71～72・高さ54	斧(底) 鋸(側)	胴体	平底	礫多数	珠洲擂鉢(裏込め)・珠洲甕。木製品・土錘・石製品・須恵器甕	裏込めの擂鉢の年代から14世紀代か・船底の木栓と、ちぎり確認
2 SE295	丸木舟	最大幅70・内底幅48～58・高さ32	斧	胴体	平底	礫・部材投入 自然木が直立状態で検出	木製品・土錘	
3 SE582	丸木舟	最大幅73・内底幅50・高さ35～38	鋸	胴体	平底		木製品・土錘	
4 SE587	丸木舟	最大幅87～91・内底幅50～62・高さ32～38	斧	先端	やや丸底		木製品(人魚木簡他)	縦板の年代測定(1287年)片方の舟がSE04の丸木舟と同一のものとの指摘

・八郎潟湖底出土のくり舟（秋田県指定有形文化財）

昭和32年～44年の八郎潟干拓工事中に湖底から丸木舟が発見された。時期不明。オモキを2本使用し、中に補助材をカスガイでつないだ復材のくり舟。八郎潟の舟はちぎりを入れるもの一般的。形状から川舟と想定されている。復材の刳り舟である。

3 民俗事例

男鹿のまるきぶね（重要有形民俗文化財 指定1艘）

単材刳り抜き舟。信仰の山である「お山」（真山・本山）の木で造ると大漁をもたらすとされた。この山は藩の留山であり、各村では藩より造船のための原木払下げの特権を有していた。

・現存するまるきぶね 1艘 男鹿市戸賀 個人蔵 現役で活躍中（春季になまこづき漁にて使用）

樹齢は300年以上 岩礁地の沿岸漁業に適し、波や潮流に左右されにくい。手入れをすれば三代、100年はもつという。製作には6か月以上が必要。

北海道における事例

鈴木 信（公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター）

1. はじめに

舟出土遺跡が13か所、そのうち12か所は続縄文文化期（弥生・古墳時代）以後の例で、なかでも船体（丸木舟の一部・準構造船の一部）・船材・推進具は擦文文化期～アイヌ文化期（古代・中近世）例が多数であり、近世アイヌ文化期の例が極めて多い。紙幅の制限より以下では外洋航海用に係るであろう準構造船について概観する。

2. 出土資料

縄文後期には舟形土製品（函館市戸井貝塚）があり、これは丸木舟の両舷に舷側板を取り付けた準構造船の表現の可能性を示す。続縄文前葉には苫小牧市タブコブ遺跡の舟形土製品、後葉には恵庭市ユカンボシE 7 遺跡の土器絵画がある。前例は両舷に舷側板を取り付けた準構造船の表現であり、後例（図1）は舷側板端が湾曲して高まる表現より、艤艤舷端を閉じる構造（所謂、二股船）であることを示す。擦文文化期には札幌市K 39 遺跡、千歳市美々8 遺跡、千歳市ユカンボシC 15 遺跡船体より（丸木舟の一部・準構造船の一部）・船材・推進具・舟形木製品・土器絵画が出土する。アイヌ文化期の類例には丸木舟・船材・舟形木製品がある。遺跡名：沼ノ端・ママチ川・根志越3・上野地区・厚岸湖からは丸木舟が、遺跡名：千歳川左岸・K 483・美々8・ユカンボシC 15 では丸木舟の一部が、遺跡名：沼ノ端・オサツ2・オサツ14・厚岸湖・美々8・ユカンボシC 15 からは準構造船の一部（舟敷・舷側板）と車櫂受部が出土している。また、これらのうち遺跡名：沼ノ端・厚岸湖・美々8・ユカンボシC 15 では丸木舟と準構造船の両方が出土する。

3. アイヌ絵に描かれた板綴船

描かれた板綴船（アイヌ語：イタオマチブ）は以下に区分ができる。「舷側板一段・漕ぎ手が一列並び」を「小型板綴船」（図2）、「舷側板二段・漕ぎ手が二列並び」を「大型板綴船」（図3）、中間「舷側板二段・漕ぎ手が一列並び」を「中型板綴船」。

描かれた板綴船で唯一大きさが知られるのは「大船図」『蝦夷島奇観』であり、「七尋半 = 37.5 尺 ≈ 37.5 × 30.3cm = 1136.25cm」と記されている。

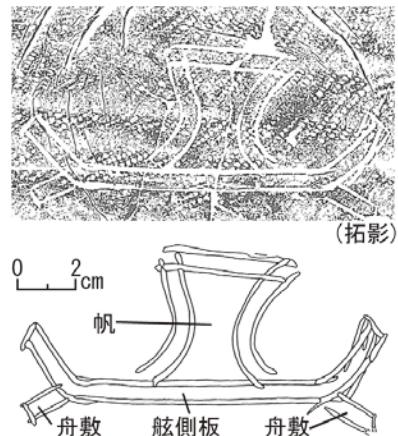


図1 古墳時代後期の土器絵画



図2 小型板綴船

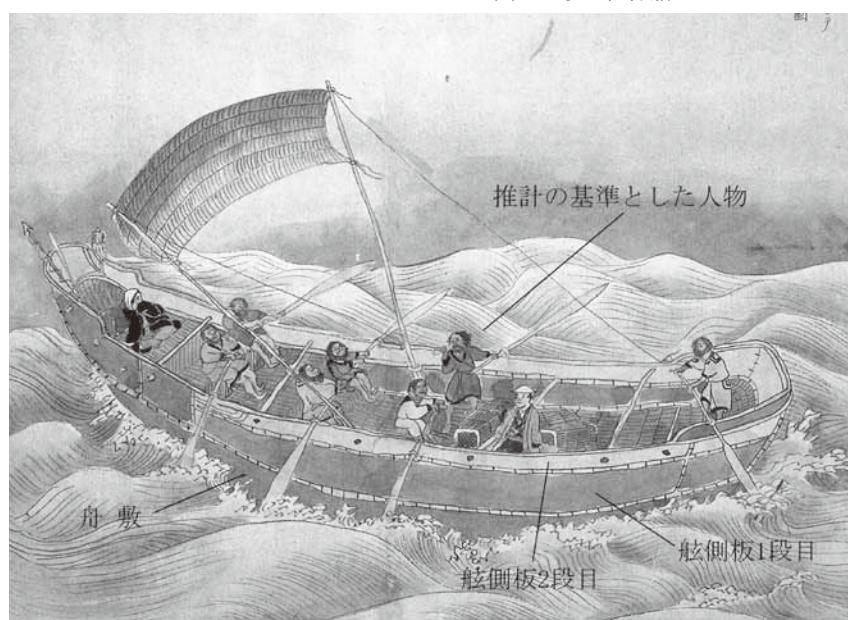


図3 大型板綴船

4. 近世・近代文献史料に現れた板綴船

『蝦夷国報告書』、『松前蝦夷記』、「田名部通諸湊役錢取立方につき定目」『青森県史資料編 近世4』によれば、100～300石積の板綴船が17世紀前葉～18世紀末に津軽海峡を航行していた。明治初期には、開拓使顧問 H.Capron の日誌には目視によるが板綴船は915～1830cm、丸木舟610～915cmである。博物学者 T.Blaikiston の観察記録には丸木舟約1067.5cmである。明治初頭には、100石積和船が石狩川河口から空知太（中流域の中間）まで、米20俵（4斗入り俵で2.5俵が1石、20俵→8石積）を積んだ丸木舟が石狩川河口から神居古潭（中流域と上流域の境）まで、遡行しており、石狩川河口から空知太までの間は板綴船と大型丸木舟はともに航行していた。

5. 船体構造と積載量の復元

板綴船とは単材を刳る船底（瓦・舟敷・敷と呼称）に舷側板を縄で綴り付ける構造であるから、板綴船の積載量は舟敷の規格によって規定され、舷側板の高さ分だけ増容積される。舟敷は丸木舟とほぼ同じ形状であるから、板綴船と丸木舟との比較によって積載量を推定し得る。

石狩川中下流域の現存・出土丸木舟と最近隣地域出土板綴船舟敷の測定値（表1）より、同一地域内では両者の全長・深さに違いはなく幅と両舷角が相違する。出土舟敷の平均両舷角度33°である。板綴船舟敷は丸木舟に対して最大巾で1.30倍、深さ1.04倍であるから板綴船舟敷容積は丸木舟の1.35倍にあたる。石狩川中下流域では全長7m前後の丸木舟が一般的であったと考えられる。板綴船は舷側板の高さ分だけ増容されるので中央部舷側板幅値が積載量を規定する。板綴船は舷側板の高さ分だけ増容積されるので上下辺が残存する出土舷側板の大きさを表した（表2）。1段目中央部舷側板幅平均値28.7cm、比べて2段目のそれは24.0cmと狭い。舳艤側舷側板幅は2段目中央部舷側板幅平均値に近い。中央部舷側板幅の平均値は27.1cmである。また、舟敷と舷側板の縫合・舷側板どうしの縫合には

綴じ代があることが『入北記』板綴船横断面略図より知られる。1段目の綴孔～板縁辺の長さ平均値が2.9cmで、2段目の綴孔～板縁辺の長さが1.5cmであり、この数値を綴じ代と考え舷側板の幅から以下の数値を減じた。1段目の幅：27.1 - 2.9cm = 24.2cm、2段目の幅：24.0 - 1.5cm = 22.5cm。

舟敷長7m前後の規格における板綴船の容積を推定する前段に、舟敷平均両舷角33°と舟敷幅と舟敷深さと中央部舷側板幅より、最大幅における舟敷+舷側板の断面積を推定する（図4）。図より舷側板1段目高は23.0cm、舷側板1段目高は21.0cmとなる。よって、舟敷断面積は1870.5cm²、舷側板1段目断面積は1840.0cm²、舷側板2段目断面積は1963.5cm²となり、これらの比は、舟敷断面積：舷側板1段目断面積：舷側板2段目断面積 = 1:0.98:1.05である。

表1 板綴船舟敷と石狩川中下流域の丸木舟の法量

遺跡名など	名称	船種など	全長(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	両舷角(°)	備考
沼ノ端	2号艇	板綴船・舟敷	650	74	30	34.0	両舷角=右舷角×2
沼ノ端	4号艇	板綴船・舟敷	766	72	27	32.0	両舷角=右舷角×2
			708	73	29	33.0	
沼ノ端	0号艇	丸木舟	903	94	30		外れ値とする
沼ノ端	1号艇	丸木舟	785	74	30		
沼ノ端	3号艇	丸木舟	740	78	35		
上野地区		丸木舟	663	60	25	40.0	
ママチ川		丸木舟	728	58	26	40.5	舟底厚5.4cm
根志越3		丸木舟	—	—	—	43.5	舟底厚3.0cm
石狩川中下流域	由良№21	丸木舟	725	40	31		現代製作
石狩川中下流域	由良№22	丸木舟	746	44	25		現代製作
石狩川中下流域	由良№23	丸木舟	695	61	23		近代遺物
石狩川中下流域	由良№24	丸木舟	590	36	26		現代製作
			709	56	28	41.3	
板綴船舟敷数値/丸木舟数値：							
1.00 1.3 1.04							

表2 出土舷側板の大きさ

遺跡名	層位	種類	全長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	綴孔～板縁までの長さ(cm)	備考
ユカンボシC15	I B3層	艤艤側1段目	156.2	23.2	2.6	3.0	
ユカンボシC15	I B2層	艤艤側1段目	189.6	23.6	2.4	3.5	
				23.4	2.5	3.3	
ユカンボシC15	I B3層	中央1段目	157.5	26.4	2.3	2.3	
美々8	OB層	中央1段目	366.3	31.0	1.9	3.5	
ユカンボシC15	I B2層	中央2段目	142.0	24.0	3.1	1.5	
*斜字体は残存長						27.1	2.4 2.4

*厚さは最大幅における値

*綴孔～板縁までの長さ(cm)は最大幅に直近の孔の数値で、上下がある場合はその平均

大型丸木舟の積載量は8石積より、舟敷長7m舟敷容積は8石 \times 1.35=10.8石積、舷側板1段目容積:10.8石積 \times 0.98=10.6石積、舷側板2段目容積:10.8石積 \times 1.05=11.3石積。

以上より、舷側板一段・漕ぎ手が一列並びの小型板綴船は舟敷容積+舷側板一段目容積:10.8+10.6=21.4石積以下、舷側板二段・漕ぎ手が一列並びの中型板綴船は舟敷容積+舷側板1段目容積+舷側板2段目容積:10.8+10.6+11.3=32.7石積以下と推定される。舷側板二段・漕ぎ手が二列並びの大型板綴船は、漕ぎ手が二列なので中型板綴船の最大幅の二倍近くはあるので32.7 \times 2=65.4石積以上となる。

ただし、外れ値とした沼ノ端0号艇、H.Capronが目視した丸木舟、T.Bakistonが観察した丸木舟のように全長9m以上になる大型丸木舟もあると思われる。同様に、大型丸木舟を舟敷とする大型板綴船も想定でき、『蝦夷島奇観』「大船図」は全長11m位、H.Capronの目視最大値全長18m前後も存在する可能性が高い。仮に舟敷長7m以上の規格が全長9m・11m・12m・18mであれば、舟敷長7mの1.29倍・1.57倍・1.71倍・2.57倍になるので、65.4 \times 1.29=84.4石積、65.4 \times 1.57=102.7石積、65.4 \times 1.71=111.8石積、65.4 \times 2.57=168.1石積となる。

船体容積の推定にはアイヌ絵を用いることも可能であると考える。(図3)中、立位人物の身長を1.5mと仮定し計測基準とすると、全長12m・最大幅1.8mとなる。そして、中世本州の準構造船は舟底が複材である以外は板綴船とほぼ同じ構造なので板綴船の積載量が推定できる。石井謙治(1995『和船I・II』法政大学出版局)によると13世紀代の250石積準構造船(『北野天神縁起絵巻』所載)の復元値が全長32.6m・最大幅2.4mである。仮に全長 \times 最大幅で比較すると(図3)板綴船は北野天神縁起絵巻準構造船の27.6%にあたるので250石積 \times 0.276=69石積と推算できる。いっぽう、二者はほぼ同じ構造なので全長で推算することも可能であり(図3)板綴船は北野天神縁起絵巻準構造船の36.8%にあたるので250石積 \times 0.368=92石積と推算できる。両数値は中型板綴船の最大幅の二倍以上の容積65.4石積を上回る値なので65.4石積を大型板綴船の積載最低値とした場合は妥当な数値といえる。両者の乖離が大きい理由は、大型板綴船は北野天神縁起絵巻準構造船に比べて幅が狭いことである。前述した板綴船全長だけ伸ばした推算値12m \rightarrow 111.8石積であるから全長による推算値92石積に近い、同一形態の船における比較を有意とすれば全長による推算値に確からしさがある。ひとまずは、大型板綴船の積載量を65.4~300石積と推定する。

6. 海路について

『続日本紀』『日本後紀』『日本三代実録』に拠れば擦文文化人は秋田郡~飽海郡(山形県北部沿岸)に現れていた。それ以前は北海道系土器の分布によって類推するしかない。弥生時代後期後半には聖山KⅡ群・後北C₁式が新潟県西部、古墳時代前期後半には所謂北大I式が山形県南部から、少数出土する。続縄文文化人は弥生時代後期後半には北陸中部沿岸まで、擦文文化人は古代には東北中部沿岸までを活動海域にしていたと考えられる。研究集会直後に久田正弘氏より、高岡市下老子笹川遺跡で帶縄文のある天王山式が出土したことを教えていただいた。弥生時代後期前半に活動期が遡る可能性もある。

引用参考文献は紙幅の都合上割愛させていただきました。『発表要旨・資料集 平成25年度環日本海文化交流史調査研究集会 舟と水上交通』2013年 公財石川県埋蔵文化財センターを参照してください。

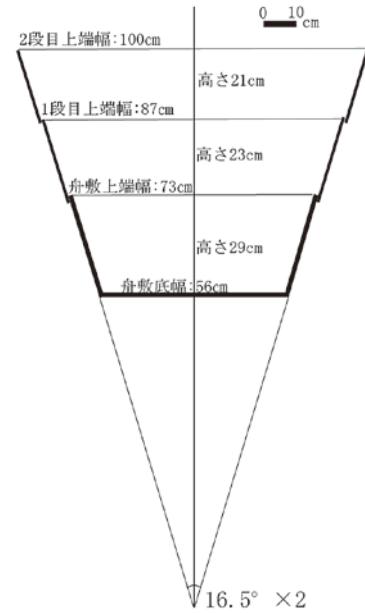


図4 舟敷長7m位の板綴船推定横断面

討論と見学会

8人の講師による発表のあと、討論会が行われた。討論会は時間の関係上、以下の2つのテーマに関して見解を述べる形となった。一つは、舟の製作技法（技術）の発展による舟の変化、もう一つは舟による交流・交易に関するものである。

前者のテーマについて、縄文時代、弥生時代、中世の3つの時期の見解が示された。縄文時代の丸木舟の製作実験では、石斧を用い原木の伐採から丸木舟を造るのに延べ42日間要した。弥生時代と比べ石器しかない縄文時代は板材の加工は難しく、丸材をほりぬく技術に終始していた。弥生時代以降は、板材から櫂などを加工してつくる技術は認められているが、縄文時代は石斧による加工に限界があった。

弥生時代には準構造船が造られるようになり、準構造船の製作に鉄器の使用が大きく関係していた。準構造船の堅板、舷側板は鉄器できちっとした加工がなされ、長い舷側版でも鉄器が使用されていた。現在最古の準構造船は滋賀県の赤野井浜遺跡から船首が出土し、弥生時代前期から中期前半頃のものとされる。鉄器を前提に考えると、弥生時代後期から準構造船は造られていくと考えられ、前期・中期前半くらいに準構造船が日本で造られていたとは想定ににくい。弥生時代中期段階からゴンドラ型の舟は絵に描かれ、これを準構造船とみる見解があり、そのように考えるならば、中期段階のゴンドラ型の舟は準構造船と思われる。青谷上寺地遺跡から出土した両端が反りあがったつくりの丸木舟、つまり角型反りあがり丸木舟はゴンドラ型の舟であり、ゴンドラ型の舟は丸木舟でも良いのではないかと思われる。似たような丸木舟は吉野ヶ里遺跡でも出土している。ちなみに、青谷上寺地遺跡出土の角型反りあがり丸木舟は弥生時代前期後葉から確認されており、これは必ずしも鉄器がなくてもできる。

14世紀以前は、板自体を削って打って舟を造っていき、このような板材を合わせ水漏れの心配のない舟の材として使うのであれば、その後刳舟と板船の技法を船体に活かした準構造船に分類されるオモキ造りなどが発展していったと考えられる。また、もともとくりぬいた部材を組み合わせて造ることで、さほど水漏れの心配のない舟を造ることができた。14世紀には、縦挽き鋸が出現してきちつとした板をつくる技術がうまれ、このような板をつくることができることにより、板あわせによる舟の大型化、構造船の普及が進んでいったのではないかと考えている。特に、オモキ造りに関し、その構造をもつドブネは板の端点をしっかりと合わせる必要があり、ここからの水漏れを防止することでも鋸の技術革新が必要不可欠であったのではないかと推測する。

後者のテーマについて、舟の技術革新によって経済活動が盛んになっていく一方、交易品によって舟の大型化・規格化がなされ、その技術も伝わっていったと推測され、この観点から弥生時代の舟による交流の実態について見解が示された。

各地でみられる堅板型準構造船はわりと同じようなつくりで、遠距離交易がなされることで舟の技術が伝わり、同じような技術の舟が造られていったと考えられる。交易品の鉄器は1隻にどのくらい積んだのか分からぬが、運搬するのにそれなりの大型の舟が必要であり、その舟が交易で行き来する中で、大阪でも、北陸でも似たような舟が広がっていったと推測される。



討論の様子

翌日に資料見学会が行われた。表で示された出土遺物の他に、白江梯川遺跡から出土した舷側版とみられる船材について検討した。資料見学会では多くの意見が出され、意見交換の活発な見学会となつた。この見学会ででた意見をいくつか示しておく。

〔舟形木製品〕

- ・畠田遺跡出土のものは浅いタイプの丸木舟か。
- ・千代能美遺跡出土のものには竪板を入れる溝があり、準構造船の舟形である。

〔準構造船の竪板〕

- ・千代能美遺跡出土のものは舷側板を入れる部分が約60cmで、小型の舟と考えられる。また両側に対となってあけられているホゾ穴には補強する材を入れてあったのではないか。

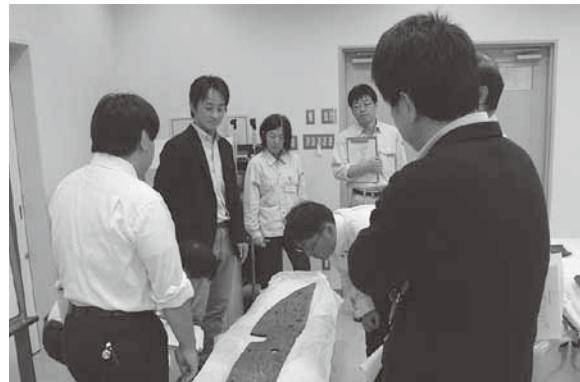
〔丸木舟〕

- ・藤江C遺跡出土の丸木舟の上方に穿たれている孔は、縄を通して舟をひくためのものか。

〔舟部材〕

- ・白江梯川遺跡出土の舷側版とみられる部材は端部が加工され、また割り貫かれている孔の形、大きさの異なるものが数種類あり、再利用されていると考えられる。舷側板だとすると大きな舟になる。
- ・猫橋遺跡出土の舳先ないしは艤付近の部材と舟底部か船尾から立ち上がる部分の部材はつながるとみられる。

(北川晴夫)



資料見学会の様子

見学会資料 出土品リスト

2013・10・26

遺跡	所在地	出土遺物	出土遺構など	時代	樹種	備考
上町カイダ遺跡	七尾市	舟形木製品	SD30	中世	スギ	
		〃	SD31	〃	スギ	
三引遺跡	七尾市	櫂	貝塚を基盤とする層	縄文早期末～前期初頭	カヤ	
小島西遺跡	七尾市	舟形木製品	下層3層	奈良平安時代	モミ属	
		〃	〃	〃	モミ属	
		〃	〃	〃	コナラ属 アカガシ亜属	
		櫂	〃	〃	コナラ属 アカガシ亜属	
		〃	下層	〃	クリ	杭に転用
		アカ取り	下層3層	〃	スギ	
寺家遺跡	羽咋市	舟形鉄製品	4層	9世紀第2四半期		
畠田遺跡	金沢市	舟形木製品	〃	弥生終末～古墳前期	ヒノキ	
畠田西遺跡群	金沢市	櫂	SD07	古墳中期・後期	シイノキ属	畠田・寺中遺跡 他2遺跡
		アカ取り	SD08	〃	スギ	
		縦板	川	古墳前期の可能性	スギ	
藤江C遺跡	金沢市	丸木舟	SE7B001	古墳後期		井戸側に転用
		〃	〃	〃		〃
千代・能美遺跡	小松市	腰掛	川跡	古墳前期	スギ	
		縦板	〃	〃	スギ	
		櫂	〃	〃	スギ	
		アカ取り	〃	〃	スギ	
		舟形木製品	〃	〃	スギ	
		〃	〃	〃	スギ	
漆町遺跡	小松市	舟形土製品	1号大溝	古墳前期		
		〃	114号土坑	〃		
		〃	333A号土坑	〃		
白江梯川遺跡	小松市	丸木舟	第15号井戸	平安		井戸側に転用
		〃	第20号井戸	中世		〃
		〃	〃	〃		〃
猫橋遺跡	加賀市	舳先ないしは艤付近	SK13	弥生終末	スギ	井戸構造材に転用
		舳先ないしは艤付近	〃	〃	スギ	〃
		刳船船底部か、船底から立ち上がり部分	〃	〃	スギ	〃
		刳船船底部か、船底から立ち上がり部分	〃	〃	スギ	〃
		刳船船底部か、舷側板	〃	〃		〃
		舷側板	〃	〃	スギ	〃